
恋愛ゲームの法則

章久

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋愛ゲームの法則

【Nコード】

N0563W

【作者名】

章久

【あらすじ】

十数年前のバブル絶頂期の物語である。

独立して成功した男と、大手不動産会社の管理職をしている友人同士、恋愛の物語である。

恋愛の相手は六本木の水商売のホステス。

恋愛をゲームと捉えて不倫を楽しむ神林と、水商売であろうと真剣な恋愛をしてしまう杉山。

純粹な気持ちのぶつかり合いと駆け引き。

現実起きた恋愛を、二人の男と二人の女が苦悩する。

ゆるつとした恋愛物語です。

水商売の女性に恋をしてしまった男性諸君、必見です。

第1章 カメリア・ブルー

第一章・カメリア・ブルー

山崎由紀子の申し出を、目の前にいる本人の口から聞いたとき、杉山直樹は天にも昇る想いがしたことは確かだった。しかし、時間が経つにつれて冷静さを取り戻してきた時にふと考えてみると、それが彼女の本心ではないような、話しの展開上勢いで口走ったことではないかという気がしてきた。よく考えてみれば、それは誰にでもわかることで、真に受ける方がおかしいと言われてもしょうがない内容だった。

それはあまりにも唐突な申し出だったのだ。そして、それは夢のような提案だった。だから、言われた直後は気持ちがあがってしまったが、時間の経過とともに冷静になってみると、彼女の言葉は、きっと本心ではないという思いに採れわれ始めた。

これがたぶん彼以外の他の男だったら、たとえば彼の親友である神林幸一郎だったとしたら、あり得る話かもしれない。

女性に対して弱気で奥手な杉山としては、俄かには信用できないような内容だったし、今までの女性経験があまりにも乏しいので、そんなことが日常あり得るとは考えにくかったのである。つまり彼にとって、それほど意外な申し出であり、信じ難い内容だったのだ。自宅へ向かうタクシーのなかで、彼は半信半疑ではあるが、とりあえず行動にうつしてみようか、それとも女性の達人の異名をもつ神林幸一郎に相談してみようか、懸命に思案していた。

杉山直樹が、山崎由紀子からその申し出を受けたのは、二十一世紀の声を聞いて間もない、平成十三年一月十日のことである。そして、それはごく普通の会話の中から生まれた。

この日、仕事を終えた杉山直樹は、旧友である神林幸一郎の呼び出しを受けて、六本木にある「カメラ・ブルー」というクラブに出向いた。

「カメラ・ブルー」は、六本木のロアビルの裏手に位置し、クラブやキャバクラ、カラオケバーなどが所狭しと寄せ集まった雑居ビルの四階にある。

二十坪程の四角いフロアを大きく四つに区画し、その一区画ごとに、十人ほど座れるように円形状にソファを規則正しくに並べてある。内装は、茶色を基調として、シックにまとめてあり、落ち着いた飲める雰囲気醸し出している。

入り口から入って、右奥にはピアノが置いてあり、一時間ごとにピアノストが来て、バラードを中心に演奏している。高級感を味わえるミニクラブだった。

杉山直樹が、神林幸一郎と会うのは実に三ヶ月ぶりであり、その間電話では何度も話しているのだが、お互い多忙なために時間の折り合いがつかず、会う機会を逸していたのだ。

今回は、神林が無理矢理杉山を呼び出した。というのも、いつまでも杉山の都合を聞き入れていると、いつまでたってもふたりの再会は果たせないと神林が痺れを切らしたことで、神林にとって、今日杉山を呼び出さなければならぬ理由があった。もともと杉山だつて、神林を避けていたわけではなく、年々の仕事の量が増えてゆき、特に管理職になると余計な会議も増え、気づくと会社に雁字搦めにされていたのだ。神林には申し訳ないと思いつつも、仕事を優先せざるを得ない状況だったのである。

杉山直樹と神林幸一郎のつきあいはかなり古い。

杉山は、今年三十九歳で今は独身。神林幸一郎は、杉山直樹より四つ年上で、こちらは妻と可愛い男の子が二人いる。中学一年と小学五年だ。

十七年前に大手アパレルメーカーの「堅山物産株式会社」で、神

林の所属している販売促進部に杉山が新入社員として入社したのが知り合ったきっかけである。

神林は、杉山の仕事の指導員でもあったし、社会を知る上でも、よき指導者だった。ふたりが意気投合するのに、そう時間はかからなかったのである。

バブルが崩壊して間もない八年前の平成五年、それまで順風満帆だった会社が急激な業績悪化、倒産寸前まで陥いることとなる。会社は希望退職者を募るという苦渋の選択を取らざるを得ない状況になった。

そんな希望退職に、周囲の制止も聞かずに、杉山はあっさりそれに乗じてスピアウトした。

それには彼なりに考えがあり、また別の理由もあつてのことだが、それはさておき、杉山はその後一年間の充電期間を経て、中堅不動産会社「日綜地所株式会社」に転職し、人事課長として辣腕を奮った。

一方、神林は、杉山の退職からちょうど四年後にやはり退職したのだ。十年以上在籍した会社だけに、最後まで復活を信じていたようだが、会社が何とか倒産は免れたものの、一向に再生の気配すら見られず、結局何回目かの希望退職募集時に申し出て退職した。

神林は退職するとすぐに独立して会社を創った。フリーのプランナーとして起業したのだ。現在は昔の経験を生かし、業界を問わず数多くの顧客を持って幅広く活躍していた。

杉山と神林には共通点が多い。

体型がまず似ていてどちらかといえば痩せ型である。最近どちらも出かかった腹部を気にするようになったが、昔から見た目が同じでしかも服装のセンスもどちらが真似たかわからないが、似たりよったりだった。

現在での外見の二人の決定的な違いといえば、彼は独立しているのでスーツを着る必要はなく、服装は常に私服で活動している。時折ジャケットにネクタイという格好をしているが、常にダンディさ

を売り物にしている。

杉山はいつもスーツだ。ふたりとも服装のセンスはあるほうだと思う。所帯じみて見えないところや、実際の年齢よりも四、五歳若く見られるところなども共通している。

ふたりのつき合いは、杉山のスピアウト後も続き、四つの年齢差を感じさせない程良好な関係を保っていた。杉山にとって神林の存在は、利害関係でしかつき合わない社内の同僚や、飲むたびに説教しかしない上司よりも気持ちよく同じ時間を過ごせたし、何よりもお互いの性格や好みを知り尽くしていた。

杉山が「日綜地所株式会社」で役員からのうけもよく、着実にその地位を築きあげていたにもかかわらず、人事課長の椅子を捨てて、昨年の年末にいともあっさり会社を退職したときには、杉山の良き理解者とはいえ、さすがの神林も呆れてモノを言わなかったが、その直後に、やはり中堅の不動産会社「カリオン・エステート株式会社」の人事部長として就任した時には、杉山の實力を評価してくれて、自分のことのように喜んでくれた。

杉山は現在独身だが、結婚暦がない訳ではなかった。六年前に最愛の妻を病気で亡くし、今まで独身を貫いている。

何度か神林は、杉山に結婚する意思がないかを問い質したことがあるが、杉山は曖昧に言葉を濁すだけで、はっきりした返事をしたわけではなかった。

「そんなに女房が忘れられないのか？」

「そんなことはないですけど、縁がないだけですよ」

杉山は苦笑いして、直ぐに話題を変えようとした。杉山の妻が他界した後、杉山自身が女性とつきあったことがないかというところでもない。神林が知っている範囲だけでも二人ほどいる。ただし結婚はもとよりあまり長続きしていない。亡き妻のことをまだ引きずっているのかと、神林が心配になるほどあっさり別れていた。

杉山には、九歳になったばかりの一人娘、亜美がいる。妻の忘れ形見だけに、杉山自身かなり溺愛しているが、日に日に妻に似てく

る娘に、妻を忘却の彼方へ追いやることができないでいるのかもしれなかった。

神林はよく杉山に女性を紹介するが、特に杉山を再婚させようなどという意図があつてのことではない。まあ、有り体に言えば、ふたりとも女好きだったということなのだろう。

この日神林が「カメラ・ブルー」を選んで、杉山を呼び出したのは、彼なりの思惑があつてのことだが、かねてから六本木でセンスのいいクラブを杉山に紹介するという口約束をこの日に実行したことにもなる。

杉山が「カメラ・ブルー」に現れたのは、日付も変わった午前零時過ぎであつた。それとは逆に、神林は、この日はこの店が三件目で、しかもしたたかに酔つていた。

「よう、随分遅かつたじゃないか。部長様がそんなに仕事しじゃないなあ」

全くの素面で現れた杉山に、神林は早速皮肉を浴びせてきた。神林は昔から、仕事とアフターファイブの切り替えがはつきりしている方だつたと思う。仕事熱心で、昼夜を問わず仕事に没頭するタイプだが、それだけに人とのつきあいも大事にする性質だつた。しかも、今日はどうしても杉山には登場してもらわねばならない理由があつたので、なかなか現れない杉山に、内心焦りを感じていたのかもしれない。

「どうも、遅くなりました」

と言つて、杉山は勧められた席に腰を下ろした。ソファには、既に四人のホステスが陣取り、神林と談笑していた。杉山が勧められた席は、壁に面したソファで、ホステスを一人挟んだ神林の横である。

杉山の前には、気持ち程度の小さなテーブルがあり、それを挟んでホステスが一人正面に座っている。右側にも一人いるので、杉山は三方からホステスに囲まれていることになる。

店内は、時間も時間なので、ほとんど客はおらず神林の貸切状態だ

った。後で聞いた話だが、この店は、金曜日以外は、ほとんど客はいないそうなのである。

高級クラブとはいいい難いが、落ち着いた雰囲気といい、ホステスの質の高さといい、神林が常連客として通い続けた上に、人に紹介したがるのも頷けた。金額もそれほど高くはないらしい。

「新しい職場はどうだ？」

神林が、タオルで顔を拭いている杉山に話し掛けた。神林と杉山の間には、ホステスが一人座っている。

「思ったよりやる事が多くて大変ですよ」

杉山は疲れた表情で大袈裟に溜め息をついた。遅れて来た言い訳のつもりだった。

「最初のうちは仕方ないさ。それに自分で選んだことだろう」

「それはそうですね……」

杉山は不服そうに頷いた。

「それに事務所が六本木じゃあ、環境が良すぎないか」

「仕事に身が入りませんよ」

杉山は苦笑しながら冗談交じりに言った。

事務所の所在地が六本木にあると説明すると、大抵の取引先や業者の担当者は、「環境は抜群じゃないですか」とか、「まっすぐ帰らないんじゃないですか」と言って羨ましがる。杉山自身、六本木で仕事するのは初めてだったので、そういう意味で、半ば楽しみにしていたことは事実だったが、現実はそのいかなかった。

横浜に住んでいる杉山にとっては、六本木は通勤に不便だった。

六本木は、都営日比谷線と同じく都営大江戸線が通っている。通常、横浜からの通勤となると、横浜から都営日比谷線に直接乗り入れている東急東横線で六本木まで行くことになるが、これが朝の通勤時には最悪だった。時間がかかり過ぎて、とても悠長に乗っていただけないのである。東急東横線を使わない方法としては、現在杉山が取っている方法で、JR新橋駅まで出てバスに乗る。または、JR浜松町駅から都営大江戸線に乗り、六本木まで行く方法がある。どち

らも、東急東横線を使うよりよっぽど早い。いずれにしても、横浜から通う杉山にとっては不便この上ない。

道路事情はというと、これもイライラするほど渋滞が酷い。平日夜六時を過ぎると、六本木の交差点を起点に、どの道路も渋滞で身動きが取れなくなる。

街の店も、華やかであることは認めるが、若者と外人の街という印象が強く、杉山にはそぐわない気がしている。

杉山にとって、六本木で仕事をしているメリットなどなにひとつなかった。

ましてや、仕事に追われる毎日に、六本木にいることすら忘れてしまうほどだった。実際、杉山が転職した会社は、経営状態は順調だが、人間関係に大きな問題を抱える課題の多い職場だったのである。事実、六本木で飲むのは、会社が行なった杉山の歓迎会以来、今日が二度目だった。

隣に座っていたホステスが、

「今まで仕事しはってたん？　がんばりモンやなあ」

と、京都弁で話し掛けてきた。ふっくらした顔立ちは京人形を思わせるほどしなやかで、身体の肉付きもよく、ボリユームのある胸を杉山の方へ押し付けてきたので、一瞬どぎまぎしたが不思議といやらしい感じがしない。相当酔っていることは確かだが、口調もしっかりしているし、乱れたところがないのはさすがホステスのプロである。

やわらかい京都弁は聞き手に安心感を与える。

杉山は、初対面にもかかわらず昔から知っていたような錯覚に陥っていた。相手も人懐っこそうに接してきている。杉山が座ると直ぐに水割りを作り出していた。店の教育もしっかりできている、と感心した。

「知佳です。宜しく」

と言って、京都弁のホステスがつこり笑ってグラスを合わせてきた。

杉山は、作ってもらった水割りのグラスを持ち上げ、「はじめまして、杉山といます」と言いながら、軽く知佳と乾杯してから、水割りを三分の一ほど空けた。

知佳の挨拶をきっかけに、そこにいたホステスが順繰りに名乗りながらグラスを合わせてきた。杉山は、一人一人挨拶をしながら乾杯しなければならなかった。

杉山は、神林と違って酒はそれほど強い方ではない。飲むこと自体嫌いではないし、ましてや女の子のいる店は、どちらかというと好きな方である。店の選り好みも激しい訳ではない。その割りには、常連になることがほとんどない。今まで、相当の数のクラブやスナック、居酒屋、小料理屋、レストランなどあらゆる分野で、神林に紹介してもらったが、常連になるところか一人で行くことすらあまりない。神林が心配して店が気に入らないのか聞くことがあるが、そんなことは全くなく、只単に酒をあまり飲まないのと、仕事が忙しいので飲み歩くほどタフではないというのが杉山の理由だった。

杉山と神林の行動パターンの決定的な違いはここにある。

神林は気に入った店は必ず常連になる。店のマスターやママと懇意にし、お店ぐるみのつきあいをするのだ。この辺が神林のママなところだった。定期的に顔を出して、マスターやママとの関係を絶やさないようにする。接待にもよく使うし、友人にも紹介する。店からみれば、とても良い客だった。だから、神林に対する店の対応も丁寧だ。神林にはサービス価格で設定するし、神林の注文は大抵のことは聞き入れる。

そんな神林だから、一緒に行動している杉山も自然といい目に合えるのだから役得である。

特にクラブやスナックには、お気に入りの子が大抵ひとり存在していた。

神林は気に入った女の子を、閉店後アフターと称して店外に連れ出したり、同伴といっしょに食事をして店に入ることをよくするが、反対に杉山は決してアフターはもちろん同伴さえ申し出ること

はない。

「おまえ、なんでアフターに誘わないの？」

解せない、といわんばかりに神林が杉山に尋ねるが、杉山は、自分あたりが誘っても、女の子は喜ばないと思うので誘わないんだと答える。

神林がよく杉山に言うのは、「おまえはトークも上手いし、女の子に対する気遣いもしっかり出来るし、それにも増して酒の飲み方がスマートだから、女の子を同伴やアフターを誘っても、その気になるホステスは少なくない筈だ」と勧める。

杉山にとってホステスとは、決して偏見の目で見ているわけではないのだが、男の扱いはお手のものだろうし、仕事として男に言い寄るのだから、利害関係なくしてつきあえない相手だと思っている。つまり、社会的地位も、経済的余裕も中途半端な杉山あたりがもてるわけがない、というのが杉山の持論だった。

神林のホステスに対する考え方はちよつと違う。駆け引きなのだから気楽につきあえばいいのだ。名誉だ、金だは関係なく、フィーリングさえ合えば彼女たちはついてくる。その辺のOLと何ら変わりはない。ただ、少しだけ贅沢にできているだけだ、と思っている。もつとフランクに考えればいいと、彼は常々杉山に感じていたことだろう。

杉山は、水割りを少しづつ飲みながら暫くの間、持ち前のお喋りで、左右の二人のホステスを相手に軽快なトークを展開していた。というのも、神林が人を呼び出しておいて、相変わらず左横のホステス相手に何やら密談をしていたからだ。

杉山は、仕事で疲れていたが、そんなことはおくびにも出さずにホステスを楽しませた。もつとも自分も楽しんではいたが。

店は2時が閉店だった。この日も神林はさつさとアフターする子を誘っていた。

「この後の予定はどうなってるの？」

突然神林が杉山に知佳の背中越しに聞いてきた。

「特にないです。毎日仕事で遅いのでちょっと疲れてますけど、久しぶりですし、今日は最後まで付き合いますよ」

「いいのか？ 無理しなくてもいいんだぞ」

「じゃあ、帰ります」

「ほ、ほんとか」

杉山は悪戯っぽい目で神林を見ると、

「冗談ですよ。大丈夫です、今日は最後までお付き合いさせていただきます」

杉山がおどけてペコリと頭を下げた。

「それじゃあ、ちよつとだけつきあつて貰おうかな」

神林は、腕時計に目をやって苦笑しながら言った。

「お任せします」

「そうしてもらうかな」

神林はそう言つて笑つたが、まんざら悪い気はしていないようだった。杉山に言わせてもらえれば、明日も仕事があるし、時間の自由がきく神林に付き合うのはしんどかったが、久しぶりの再会と、せつかくの誘いを無碍に断る訳にもいかなかった。まして、神林が杉山を氣遣っているのが良くわかる。

「ちよつと失礼します」と言つて隣に座っていた知佳が席を立つた。神林が顔を寄せてきた。

「知佳のこと、どう思う？」

「どおつて、今日初めて会つたばかりで、何とも言いようがないですけど。どうしてですか？」

杉山は少し困つた顔をして首を捻つた。初対面で、しかも十分程度しか会話しておらず、それで、どうか？と聞かれても答えようがなかった。

「杉ちゃんの好みじゃなかったっけ？」

「まあ、好みといえは好みですけど。それが何か？」

「もつと話してみたいと思わないか？」

また、神林のお節介が始まつたかな、と杉山は内心苦笑した。

「実はこの後美香とアフターするんだけど、杉ちゃんの為に知佳を誘おうと思うんだけどいいな」

美香とは、神林の左に座っているホステスで、先程から密談をしていた相手だ。

そういえば、以前に神林が杉山にこんなことを話したことがある。良く行くクラブに気に入っている女がいて何とか落としたい、と。それがこの子か、と杉山は合点がいった。

杉山が何か言おうした時に知佳が戻ってきた。杉山と神林の間に座るやいなや、神林は知佳に耳打ちしていた。相変わらず強引な奴だ、と杉山は苦笑したが、まんざら悪い気はしていなかった。知佳なら悪くない、いやむしろ当たりだ、杉山はそう感じていた。直後に、知佳が済まなそうに両手を合わせて神林に詫びていた。先約があつたらしい。

アフターの失敗である。

その姿を見て、神林は怒った表情一つせず、いいからいいから、と手で知佳を制した後、何やら美香に耳打ちした。

「そろそろ行こうか」

といって、神林が先に立ち上がった。

杉山も促されるままに立ち上がり、「ごちそうさま」と周囲のホステスに挨拶した。

どういうことになったのか、杉山には全くわからなかったが、任せると言った以上神林に根掘り葉掘り訊く訳にもいかず、黙って出口に向かった。

杉山が、出口付近でホステスからコートと鞆を受け取っていると、神林が近づいてきて、

「知佳は先約があるらしくてダメだったけど、代わりに美香が友達を誘ってくれたから、心配しないで俺につき合えよ」

そう言って、悪戯っぽく笑った。相変わらず用意周到な男だった。杉山にとっては、パートナーがいなくても気にならなかったし、変に気を遣うぐらいなら返っていない方がいいとさえ思ったが、神

林の自分を気遣う思いやりが嬉しかった。

「着替えてくるわ」

美香と名乗ったホステスが、神林にそう伝えて更衣室に消えた。誰を連れて来るのか知らないが、杉山にとってはどうでもいいことで、こういうことになったのなら、今日は家に帰りたかった。

神林と杉山は、四人のホステスと共にエレベーターで一階に降りた。通常、ホステスは客を店の入り口まで、雑居ビルの場合はビルのエントランスまで見送るのが、礼儀とされている。杉山あたりは、あまり慣れていないので、何だか偉そうで恐縮してしまうが、神林あたりは慣れたものである。

「寒いからここまででいいよ。もう戻りなさい」

神林はホステスたちを手で制して、軽く微笑んだ。

「ありがとうございます。またお越し下さい」

「御馳走様でした。またいらしてくださいね」

などと、口々に挨拶をして、ホステスたちはそそくさと戻って行った。実際、二月の午前二時過ぎは、彼女たちの薄着にはとてつもなく寒いと思う。

ホステスたちに手を振っていた神林が、杉山に近づいて来て、

「今日、美香と二人で少し話がしたいんだ。三十分位したら俺たち消えるから、杉ちゃん、もう一人の子とうまくやっていいよ」

「えっ、どういうことですか？」

「一応このあと四人で店にはいつてさあ、少し飲んだら俺たち出るから。後を宜しくってことだ」

宜しくって簡単に言うが、杉山としては誰を連れて来るのかわからないが、初対面である。見合いじゃあるまいし、二人にしましうってわけにはいかないと思うが……。神林の時々見られる身勝手さに半ば呆れてしまったが、神林のためだ、ここはぐっと堪えて従うことにした。相手の女の子とは何とかなるだろうと杉山は諦めた。

「美香が連れてくる女の子とは、お前次第でどうなってもいいからさ。よかつたら口説いてみたら？」

と言って、神林は人の気も知らずに杉山の背中を軽く叩いた。

後で神林が説明したことだが、つまりこういうことだ。

神林は美香を誘って二人で飲みに行きたいが、美香がふたりでは承知しなかった。杉山に女の子を紹介したいということで、別の女の子を誘って四人で飲むことにすれば、美香もついて来やすい。暫くして、何か口実を作った二人は別行動を取る、というより杉山ともうひとりの女の子をふたりきりにしたいという気遣いを見せて、実は神林が美香とふたりきりになる。山車に使われた訳ではないのだから、してやられた気がする。

「わかりました」

とは言ったものの、どんな女の子が来ようと、杉山にはその子を口説く気などさらさらなかった。

五分ほど待たされた後、対照的な二人の女性がエレベーターから降りてきた。一人は、言うまでもなく美香であるが、さっきの店にいた、煌びやかなドレスと違って、ジーンズにジャンパーという、到底ホステスとは見えない格好だった。それとは対照的に、もう一人は、白のスーツに毛皮のコートという、いかにもクラブホステスという出で立ちだった。

「行こうか」と、神林が促し、四人は歩き出した。自然と、神林と美香が並び、杉山はもう一人のホステスが一緒に歩く形となった。彼女は確か、店では神林の正面に座っていたと記憶している。杉山が着席した際に名乗ったと思うが、覚えていない。

「寒いわね」

彼女がコートの胸元を押さえて言った。

「まだまだ冬は終わりそうもないですね」

杉山も調子を併せて返事をした。この辺は慣れたものであるが、言葉遣いが丁寧になってしまふのは致し方ない。

五分ほど歩いて、四人は六本木の交差点にほど近い「ダイニング・バー」に入った。落ち着いた雰囲気のお店で、神林は以前からそこを

知っていたようである。もちろん、杉山は初めてであった。

「ダイニング・バー」は、六本木の交差点から神谷町方面に三十メートルほど行った右手の、六階建てのビルの二階にある。入り口こそ目立たないが、階段を上がると、モダンな店内に適度な照明が上品で、しかも広々としたスペースにゆったりとしたテーブルの配置が好感を持つ店だった。

片側がソファになっているボックスの席に、神林と美香が並び、テーブルを挟んだ向かい側に杉山ともう一人が並んで座る形になった。

杉山には、どうしても隣に座った彼女の名前が思い出せない。というより、頭の中に入ってきていなかったといえる。

「すいません。何て呼びましたらよかったですたっけ？」

杉山は、あれこれ考えるよりも、訊いてしまった方が早いと思い、遠慮がちに訊いた。

「唯惟です」といって、店の名刺を差し出した。

「これで、ゆいと読むんですか？」

杉山は感心した。最近のホステスの名前もだいぶ凝ってきた。

「もちろん本名じゃないですよね」

「まさか。本名は由紀子といいます。平凡でしょ」

唯惟は屈託なく笑った。年齢にして二十四、五歳といったところだろうか。ホステスだけに化粧が濃いのは仕方がないが、おそらく素顔も相当綺麗だろうと思わせる、整った顔立ちである。コートを脱いで、白のスーツ姿になったが、プロポーションも相当なもので、豊満な胸の割には、スレンダーな体型をしている。身長は百六十センチくらいだろうか。女性から見ても理想的な体型と言えた。

四人がそれぞれお酒とつまみを注文したあと、四人で話し始めた。この辺は神林の気遣いである。

神林が杉山にあらためて美香と唯惟を紹介して、更に杉山を二人に紹介した。

すぐにウェイターがトレイに四人分のお酒を持って現れた。

「そんなに長いつき合いができるなんて羨ましいわ」

美香がビールを飲みながら本心からそう言った。彼女はビール党のようだ。

「腐れ縁ですよね」

杉山が心にもないことを言っただけで笑った。神林と杉山の関係を説明すると、大抵の人から同じようなことを言われる。杉山にとっては嬉しい一言なのだが、照れ隠しについて、「腐れ縁だ」なんて言ってしまうのだ。

「仲がいいのね」と言われると、「ほんとには嫌いなんだけどね」などと切り返す。素直に喜ばない捻くれ者だった。

「私たちも腐れ縁かな」

と唯惟が言った。唯惟は神林と一緒にワインを飲んでいた。杉山はかなり薄く作ったバーボンの水割りである。

「あの店でよく一緒に飲みに行くのは美香さんくらいなもの」

「私もそうね」

「美香はつき合いが悪いだけじゃないのか」

と、神林が突っ込む。

「そんなことないわ」

「それとも俺とじゃ嫌なのか」

神林が茶化した。神林にしてみれば、何度か美香を食事に誘ってもしつこうにオーケーが出ないでいるもどかしさが、こつした皮肉になって出たのかもしれない。

神林が苦戦している、と杉山は意外に思った。そして、さつき耳打ちされた意味がようやく解りかけた。

「今忙しいから、もう少し待っててって言うてるでしょ」

美香になだめられて、神林はバツが悪そうにワインを一息に空けて、唯惟のグラスと自分のグラスに注いだ。

「お二人はよく飲みに行くんでしょう？」

唯惟は杉山に訊いた。

「三ヶ月ぶりに会ったんですよ、俺たち」

「へー、そうは見えませんか」

唯惟が感心している。そう言えば、俺たちは例え何年会わなくても、昨日も会っていたかのように親しい口調で話し、意気投合している、と杉山は思った。人つき合いの淡泊な昨今、珍しいことなのかも知れない。

それからしばらくは、神林が美香と、杉山が唯惟とそれぞれ話し始めた。

杉山は、実質唯惟とは初対面なので、専ら自己紹介を兼ねた会話になっている。杉山は、自分が緊張している事に気づいた。何だか見合いみたいだ、と内心苦笑した。こんなに綺麗な人とプライベートで話すのは久しぶりだったので、緊張するのは無理もなかった。会話の中で、杉山が知り得た情報は、唯惟の本名が山崎由紀子といい、昼間はアパレル関係の会社で企画の仕事に就いていること。現在二十七歳で独身、三軒茶屋の一戸建てに友達と住んでいること。ホステス歴は意外と短く、二年くらいだったことだった。私生活は意外と地味で、趣味もそれほど多くはなく、その辺の普通の女の子と変わらない。

ホステスという職業を、もっと派手で煌びやかな私生活を送っているのかと思っていた杉山には意外に映った。

話しは、お互いに持っている携帯電話の話から、待受画面の話に移り、そしてデイズニールランドへと話題が変わった。

「そう、デイズニールランドがそんなに好きなんだ？」

彼女は、携帯電話のストラップといい、携帯電話のメニュー画面を自分なりにアレンジしてミッキーマウスを画面に取り入れていることといい、デイズニールランドに異常なほどに関心を寄せているらしい。

デイズニールランドの好きな女の子は意外と多いが、ここまで執着している人は他に知らない。

「特に、アンバサダーホテルには一度泊まりたくて、でも、なかなか取れなくて」

「アンバサダーホテル？」

杉山には聞き覚えがないホテルの名前だった。デイズニールランド周辺のホテルなら、妻と生前よく泊まりに行ったものだが、アンバサダーホテルは聞き覚えがない。

「どこにあるの？」

「デイズニールランドのイクスピアリにあるんです。デイズニールランドに一番近いところにあるんですよ」

唯惟は意外そうな目でこっちを見たが、丁寧に説明した。

「そんなに人気があるホテルなんですか？」

「半年先まで予約で埋まつてるそうですよ」

「それは凄いな。平日でも取れないの？」

「大晦日にデイズニールランドへ、カウントダウンを聞きに行っただけですけど、その時もコネを使って取ろうとしたんですが、取れなかったんです」

唯惟はいかにも残念そうに言った。この子は本当にそのアンバサダーホテルというところに泊まりたいのだ。

「今でも取れないみたい……」

彼女は、いかにも行きたそうに苦笑した。杉山は、あることを一瞬ひらめいたが、口にすべきか迷った。冗談にしても、失礼な発言かもしれないと思ったのだ。

「誰か、強力なコネを持った人知りませんよね」

「そんなに泊まりたい？」

「ええ」

「彼氏は取ってくれないの？」

探りを入れる。

「彼はいませんよ」

「えっ？ まさか… ウソでしょ」

「ほんとです。今フリーですよ」

唯惟がにつこりと笑って言った。可愛い…と杉山は思った。ふと、さっき思いついた意地悪な質問を彼女にぶつけてみたい衝動に駆ら

れた。

「取ってくれた人が一緒に泊まろうって言ったらどうする?」

唯惟は、ワイングラスを口元に持って行って、口をグラスに付けたがワインは飲まずに杉山を見つめて、

「それでも行きたいわ」

と、明るく言った。

「相手が誰でも、取ってくれたら一緒に行く?」

杉山の意地悪な質問はしつこい。

「誰でもって、ちょっと考えますけど、多少は我慢してでも行きたいですね」

そんなにしてまで行きたいホテルなの?という言葉を読みこんで、杉山は、

「例えばさあ、僕がそのホテル取ったら、一緒に行く気ある?」

と、聞いてみた。かなり意地の悪い質問だったかも知れない。それに、答えは明白だった。うん、と言うわけがなかったからだ。

「いいですよ。取れたらですけど」

あっさり唯惟は頷いた。悪戯っぽい目で見ているが、からかっているようにも思えない。

「えっ? ほんとですか? からかってない?」

あっさりと答えられたので、信じられなかった。

「ほんとに行ってもいいですよ」

意外な申し出である。

「僕と一緒に、ですよ」

「当然じゃないですか。嫌なら取ってくれるだけでもいいですよ。

でも、折角だから取れたら一緒にしましょうよ」

「本気、ですか」

「ええ」

杉山が、まだ信じられないといったように、何か言おうとした時、今まで美香とヒソヒソ話をしていた神林が、杉山に向かって、

「杉ちゃん、悪いんだけど俺たちここで抜けるから、そのまま残る

なり、帰るなり、二人で相談してくれる？」

いよいよ来たな、と杉山は思った。杉山自身は、唯惟ともう少し話していた気分だった。話しは弾んでいたし、アンバサダーホテルのことが中途半端だった。ここで帰ることになると、今の話しが途切れてしまうと内心焦った。しかし、唯惟が自分とふたりつきりでここに残るとは思えなかった。

杉山は、少し残念に思いながらも、タイムオーバーなのだから仕方がない、まあ、いつものことだ、と諦めた。

ところが、意外にも唯惟が代わりに答えた。

「折角だから、私たちもう少し話していきます」

杉山はちよつと驚いたが、内心はガッツポーズをしていた。神林は、意気投合した二人に、満足そうに頷いて、杉山に向かって、「頑張つてね」と小さく呟いた。

杉山と唯惟は、神林たちを見送つてから、ソファの方に移動して座りなおした。心なしか、さっきよりも二人の間が接近したように、杉山には感じられた。

杉山は、先ほどの唯惟の申し出が頭をよぎり、落ち着かなかった。果たして、本気なのか、からかわれているのか、杉山には判断できなかったが、ただ、男をからかつて喜んでいるような人には思えなかった。

しかし酒の席である。判断ができないほど唯惟は酔つてはいなかったが、判断が鈍っているかも知れなかった。酔った勢いがないとも限らない。明日になれば、すっかり忘れているか、あれは冗談よつて笑われるのがオチだった。あまり真に受けない方がいいかも知れない、と杉山は思った。

現に唯惟は、アンバサダーホテルから話題を変えている。

杉山は、もう一度その話を蒸し返したかったが、しつこ過ぎるような気がしたし、「冗談よ」とあっさり言われてしまって、気まずい思いをするのを恐れていたので、どうしても話せなかった。

「お住まいはどちらなんですか？」

唯惟が長い髪をつるさそうに掻き揚げて言った。香水の匂いが杉山の鼻腔をくすぐり、杉山に変な感情を抱かせる。

「えっ？ あっ、横浜ですけど」

「いいところですね」

大抵横浜に住んでいるというところ、こういう答えが返ってくる。きつと、みなとみらいや元町、山手などを想像するからだろうが、横浜にもいろいろある。杉山は、横浜は横浜でも旭区といって、少し奥手に入るのである。

「奥様とお子さんと住んでいらっしゃるんでしょう？」

「妻はいません。六年前から独身ですよ」

唯惟は驚いた表情を見せたが、

「なんだか所帯じみてない気がしていたんですね。じゃあ、ひとり暮らし？」

「ええ」

「出身はどちら？」

「横須賀ですけど」

「えっ、あたし葉山ですよ」

唯惟が嬉しそうに言った。今度は杉山が驚く番だった。

「そ、そうですか。近いじゃないですか」

「今度地元で会いましょうよ」

暫く、そんなやりとりをしていたが、杉山がふと腕時計に目をやると、午前四時を廻っていた。

「そろそろ帰りますか？」

時計に目を落とした杉山の行動を、唯惟は見逃さずにそう言った。杉山としては、久しぶりにもっと話していたいという衝動に駆られた。初対面にしては、唯惟の配慮もあって、緊張感もなく愉しく話せたし、もっと唯惟のことを知りたいと思った。しかし、今日も仕事だ。それは唯惟にしたって同じことで、ここまでつきあつたくれたこと自体奇蹟に近い。これ以上引きとめるのは人道に外れる、などと大袈裟なことを杉山は考えた。

「そうでしょうか」

二人はソファを立ち、杉山は先に会計へと急いだ。

会計では、既に神林が済ませていたらしく、追加をしなかったふたりには料金はかからなかった。神林のこういう配慮は見事である。店を出ると、自然とタクシーに目がいった。確かに午前四時を過ぎると、人もまばらだが、それでもネオンの輝き、人の流れは、繁華街の様子を呈している。車の量も、昼間とあまり変わらない。

「相変わらず寒いですね。送りましょう。どうせ帰り道ですから」

「すみません。お言葉に甘えます」

タクシーはすぐにつかまった。三軒茶屋を告げると、「近くまで行ったら道案内しますから」と運転手に言った。二人は黙ってタクシーに揺られていた。杉山は、さっきの唯惟からの提案が頭から離れず、本心かどうかを確かめたくて仕方がなかったが、どうしても切り出せない。

こんな見かたをしては失礼かもしれないが、所詮クラブのホステスである。客を喜ばせる台詞は朝飯前だろう。まして、杉山のような遊び慣れていない客なら、この程度の思わせぶりで十分効果があるにちがいない。そんな風に唯惟が計算したとしてもおかしくはないだろう。そして甘い言葉に浮かれた哀れな客を、また店に呼べる。杉山は徐々に気持ちが鎮まってくのがわかった。あんなことで浮かれた自分が大人げないと、少し恥ずかしく思った。考えてみれば直ぐにわかることだった。初対面で、いくら泊まりたいホテルだからといって、好きでもない男と一泊するほど、クラブのホステスだって軽くはない。それとも、予約が難しいホテルだけに、取るのは不可能と決め付けているのだろうか？それとも、杉山が取ると言ったこと自体冗談と受け取ったのだろうか？ いづれにしても、本気ではないような気がしてきた。

そんなことを考えているうちに、タクシーは三軒茶屋に着いた。彼女はドライバーに道案内をしてゆき、自分の家の前に横付けした。「ここが私の家なの」

唯惟の家は、彼女の服装からは想像つかないような、古風な一軒家だった。住宅地の中に佇む、築二十数年の平屋。

杉山は意外の目で、その家を見ていた。

「祖母の家を借りて住んでるの」

唯惟は、杉山の気持ちを察してか、そう説明した。なるほど、そういうことか、と杉山は納得した。

タクシーから降りる際に唯惟は、

「アンバサダーホテルの予約、期待してますから、取れたら連絡してください」

と平然と告げた。

冗談ではなかったのだ。彼女は、杉山に念を押してきたのである。杉山は、曖昧に頷いて微笑んだが、気持ちが再び舞いあがっていきのかわかった。念を押してきた。これはよもや冗談や不可能と決めた上でのよもやま話ではない。彼女自身杉山がアンバサダーホテルをリザーブすることを期待しているとは思えない。

杉山は、走り出したタクシーに行き先を告げることさえ忘れるくらい、再び舞いあがっていった。

【続く】

第2章 アンバサダーホテル

第二章、アンバサダーホテル

翌朝八時三十分に出社した杉山直樹がまず最初に行なったことは、会社のパソコンを使って、インターネットでアンバサダーホテルについて調べてみることにあった。

最近では仕事はもちろん社内通達や稟議書関係も社内メールで処理するようになっており、ひとり一台パソコンの時代を迎えている。パソコンを使えない社員は容赦なく取り残されてゆくのである。

自席のパソコンで、デイズニーアンバサダーホテルオフィシャルホームページにアクセスしてみる。

インターネットの普及で、最近は何とどの情報が、パソコンからすぐさま取れるようになり、随分と便利になったと杉山自身驚かされることが多い。

昨日唯唯からの申し出を受けた時も、すぐにインターネットで調べたことを思い浮かんだ。

デイズニーアンバサダーホテルオフィシャルホームページは、全体が童話の世界へ誘うような構成と色使いをしており、目次になっているトップページから始まって、ホテルのコンセプト、設備、施設の紹介、サービスやイベントなどの紹介、そして体験談がフォトグラフと共に掲載されている。行きたいと思っている人の心を嫌でも掻き立てる、魅力あるホームページに仕上がっていた。

もちろん杉山自身デイズニーランドは何度も行ったことがあるが、アンバサダーホテルの存在は、以前にCMが何かで見たことはあったにしても、記憶に残るようなものではなかったのである。つまり、知らないようなものである。

デイズニーアンバサダーホテルは、千葉県浦安市に日本初のデイズニーオフィシャルホテルとして平成十二年七月にオープンした。同時に、イクスピアリというショッピングアーケードが併設されていて、デイズニーランドの新名称として若い女性を中心に人気を博している。

デイズニーランド周辺には、既にベイエリアと称して五つのシティホテルが建設されており、オープン以来シーズンを問わず好調な集客を示していた。今夏には、新たなデイズニーリゾートとして、デイズニーシーがオープンする予定で、それに先駆けてアンバサダーホテルとイクスピアリがスタートしたらしい。

アンバサダーホテルのアンバサダーとは、「大使」という意味である。

一九三〇年代に、アールデコをパリから世界へ広めたのが各国の大使たちだった。

アールデコは、一九二五年にパリで開催された博覧会で、各国のアンバサダーたちが、アールデコを家具やファッションに取り入れ、自国や任地となった他国に伝えてゆき、やがてそれが世界中に広まったと言われている。

つまりアンバサダーホテルは、建築やインテリアなどにアールデコを使用し、当時の優雅さと温かさをイメージしている、と同時に様々なデイズニーキャラクターのモチーフをふんだんにあしらうことによって、一九三〇年代の再現とデイズニーオフィシャルホテルとしての威厳を強調しているのである。

杉山は、一応アンバサダーホテルについての予備知識を頭に入れた後、いよいよ部屋の予約状況を見ることにした。

予約状況は、今日現在の一月十一日で、一月中の週末と祝日は一杯だが、平日は若干空いている日も伺えた。当然サラリーマンの杉山にとって、ホテルに一泊するだけであれば平日でも構わないのだが、行く以上はデイズニーランドで遊ぶことも目的に入っているだろうから、平日に予約を取るのとは不可能に近い。

二月の予約状況を見る。

デイズニーランドにはシーズンオフがないのか、と呆れるほど週末の予約は一杯だった。が、若干金曜日に空室が見られた。金曜日なら、会社が終わってから出発し、翌日は一日遊ぶことができる。二月のアウトドアは少し寒いかも知れないが、三月に延ばせば気持ちが冷める可能性も考えられるし、こんなチャンスは滅多にない筈である。無駄にせずに、早めに実行したいという思いが杉山にあったのは無理もない。

杉山は、躊躇わず受話器を取り、ホテルの予約専用ダイヤルを廻した。

二月二日か、九日をリザーブするつもりだった。相手はすぐにでた。丁寧でかつ優しい物言いは、さすが社員教育に熱心なオリエンタルグループの社員である。

予約を取りたい旨を申し出て、人数と希望日を告げると、相手もコンピューターを動かしているらしく一瞬の間があつたが、すぐに返答が返ってきた。

「二日は、デラックスツインのみお取りできますが、九日はスタンダードツインのみになります」

機械的ではない、温かみのある受け答えだった。デイズニーランドの関係者は誰もが丁寧でかつ人間味のある対応をする。このグループの社員教育には定評があり、他社が参考にするほどだときいたことがある。

「スタンダードとデラックスと違いは何ですか？」

自然とこちらも丁寧な言い方になる。フロアには誰もいないのに、何故か声量が落ちる。

「お部屋の広さですね」

「アンバサダーフロアってあるんだけど、これは何ですか？」

「アンバサダーフロアは、最上階の六階をご用意させて頂いておりまして、チェックイン、チェックアウトがフロントではなく、六階の専用ラウンジで行うことができますし、その他にも、ラウンジで

ドリンクサービスをさせていただきます」

「なるほど、結構便利なわけですね」

杉山は感心したあと、折角だからこのフロアに泊まりたいと思った。

「スタンダードとアンバサダーでは、部屋自体の違いはないんですか？」

「いえ、スタンダードフロアと比べて、アンバサダーフロアのお部屋には、様々な工夫がされていてまして、例えば、アメニティグッズなどはミッキーマウスをかたどったものが多く置かれています」

つまり、ディズニールンド好きな唯惟にはたまらないフロアということになる。やはりこちらをリザーヴするべきだろう、と杉山は思った。

「アンバサダーフロアで予約したいんですが、二月二日で空いてる部屋を教えてください」

「かしこまりました」

数秒待たされた後、

「二日は申し訳ありませんが、ございません」

「全く？」

「はい、全館満室でございます」

私は、落胆することなく、

「九日ではどうですか？」

「少々お待ちください」

また、数秒待たされた。杉山は、自席のパソコンの画面から顔を上げて、オフィスのフロアを見まわした。出勤してくる社員はまだいなかった。一時間も早く出勤したのは正解だった。

「アンバサダーフロアですと、スイートしか空きがありませんが」「スイート？いくらぐらいなんですか？」

「はい、ガーデンスイートですと、税金、サービス料別で十万円になります。その他にはパノラマスイートやロイヤルスイートがご用意できます」

いかにも高そうである。ここは、思い切ってガーデンスイートにするか、アンバサダーフロアは諦めるか、である。唯惟との約束は、アンバサダーホテルを取ることであり、敢えてアンバサダーフロアにする必要性はどこにもなかった。ただ、こういうことは、やはりムードが第一であり、というより、それが決め手となることが多く、あまりケチケチし過ぎて、折角のチャンス逃がすことにもなり兼ねない。

杉山はふともう一つの唯惟からの要望を思い出した。

「あの、シェフミツキーっておりますよね」

「ございます」

「予約するのに何か条件があるんですか？」

「当ホテルにお泊りになれば、どなたでもご予約できますが」

「つまりアンバサダーフロアでもスタンダードフロアでもどっちでも構わないということですね」

「はい」

杉山は少し考えた末、ガーデンスイートをリザーブすることにした。

二月九日まで、まだ一ヶ月近くもあることに、少し戸惑いを感じたが、焦っても仕方がないと諦めた。考えようによつては、綿密な計画を立てるいい機会、また唯惟とより親密になる有効な時間とも言えなくもない。

「では、ガーデンスイートをお願いします」

言ってる自分の声が震えていることに、杉山自身気づいて苦笑した。定型的な手続きを終えて、受話器を置いた杉山の手は、汗でぐっしょりだった。

時刻は午前九時三十分。始業時間である。気づくと部下たちが出勤してきている。杉山の電話に耳を傾けている部下の姿はない。

杉山は何事もなかったかのような素振りで、「みんな、おはよう」と声をかけた。「おはようございます」という元気な声が返ってくる。

杉山は、早速予約した事実を、唯惟に伝えたかったが、彼女も昼間は仕事をもっており、昨日聞いた携帯電話にテレコールしても出る可能性は少なかった。

杉山は、携帯電話でメールを送ることを思いついた。一刻も早く知らせて、本当に行く気があるのか、その真偽を知りたかったし、彼女の予定も押さえたかった。

ただ一点不安なのは、昨日のやり取りを唯惟が憶えているか、もしくはあれが果たして本気だったのか、ということである。

伝えた途端に「本気にしたんですか？ あれは冗談ですよ、バカみたい」などと一笑に付されては堪らない。

一瞬どうしようか迷ったが、予約をしてしまったことは事実だし、唯惟に断られたら娘を連れて行けばいい。最悪の場合はキャンセルもできる。

杉山は度胸を決めて、自席で携帯電話のメールを打ち始めた。

最近の会社は、通信手段に携帯電話を導入している会社が多い。

杉山の在籍している「カリオン・エースト株式会社」でも、管理職以上の社員は、個人の所持している携帯電話の通信料を会社が負担しているのである。携帯電話を持っていない管理職は、会社の方で用意するほどの徹底ぶりである。もちろん、メールも通信手段に使っている。それは、会社のパソコンからでも送ることができるので、会社は社員が二十四時間どこにいても捕まえることができる仕組みだった。社員は会社に見張られているような恐怖感を持つ。

だから、杉山が自席で携帯電話をいじってても、だれも不思議に思わなかったし、そういう意味では杉山にとって私用のメールを打っていても誰に咎められることはなかった。

『約束どおりアンバサダーホテルを取りました。二月九日ですが、予定は大丈夫ですか？返事を聞かせてください』

杉山のメールの書き方は、敢えて行くか、行かないかの確認では

なく、日程が合うかどうかの確認にした。返事がくるまで、杉山は心ここにあらずといった感じだった。この間、部下から話しかけられず、上司からも呼ばれなかったのが幸いした。

三十分ほど待たされてメールの返事が届いた。

『お返事が遅れてすみません。会議に入っていました。アンバサダーホテル、取れたんですね。さすがです。どうやって取ったのか、今度聞かせてください。楽しいデートになるといいですね。是非行きましょう。ところで、来週あたりで、一度食事でもしませんか？都合のつく日をご連絡ください』

杉山は今までの不安な表情が一変して明るくなり、昨人以上に舞いあがったのは言うまでもない。夢のような話が、また一歩現実味を帯びてきたのである。

杉山は、焦る気持ちを押さえつつ、辺りを見まわした。自分に関心を寄せている部下はひとりもない。この時、誰かが杉山を観察していたら、きっと彼の異変に気づいたであろう。それほど彼は落ち着かない素振りを繰り返していたのだ。

杉山は、デスクの上の卓上カレンダーを見ながら、そして自分の業務手帳と睨めっこしながら、来週なら火曜日と水曜日に時間が取れる旨を、早速メールで伝えた。暫くして返事のメールが入り、食事は火曜日に決まった。

着実に、夢のような世界が近づきつつあることを杉山は実感していた。

一月十六日火曜日、杉山と唯惟は、午後六時三十分に銀座アーバンホテルのラウンジで会い、銀座アーバンホテルの地下にある割烹「嵯峨野」でふぐ料理を食べて二時間程過ごした。

この日の唯惟は、真っ白のスーツを着ており、胸元が広く開いていて、豊満な胸が強調されていた。前回会っているとはいえ、まだ

二度目なので杉山自身緊張は隠せなかった。それに引き換え、唯惟は落ち着いている。

お客と食事することは慣れたものだろうが、数日後に一泊するところがわかっていいる相手との食事を、彼女はどう思っているのだろうか。

杉山は、食事の間じゅう落ち着かず、何の話をしたかもおぼろげだった。もちろん、ふぐの味など覚えていない。

杉山にとって唯惟は、今までつき合った女性の誰よりも華麗だった。という、今までつき合った女性に悪いが、彼女のセンスはやはり普通のOLとは一味違っていた。

夜の仕事に従事し、昼間はアパレル関係の企画をしているだけあって、ファッションセンスは抜群であり、自分の美しい部分を最大限引き出す術を知っていた。

杉山にとって、すれ違う男が振り返るような、華麗な女性とのデートは、夢の世界での出来事、非現実的な理想だったのである。それがこうして現実となり、しかも数日先には、一泊デートにまで出かけるとなると、これは夢だの理想だのと言っている場合ではなく、現実としていよいよ杉山にも春が来たのかと、有頂天になるのも無理はなかった。

とんとん拍子に進んでいるこの事態に多少の不安はあったものの、期待の方がずっと大きく、自分の中でその不安を無理に打ち消していた。いや、打ち消そうと努力していた。

杉山にとっては、ただ単に美人のクラブホステスと甘い一夜を過ごすというだけでなく、もしかすると自分の彼女に発展するかもしれないという期待もあるので、尋常でいられるわけがなかった。

午後九時過ぎ、杉山は唯惟と同伴して「カメラ・ブルー」に入った。

店内は火曜日の午後九時ということもあって、杉山の他に一組だけ客がいるだけだった。奥のソファに案内されると、マネージャーがそくさと挨拶にやってくる。

「いらつしやいませ。いつもありがとうございます」

その辺はソツがない。いつも、と言つても今日で二度目であり、一人で来たのは初めてである。現金なものである。

最も友人の神林は常連客であり、VIP待遇でもあったので、その神林が連れてきた客の杉山に、対応が丁寧になるのは当然かもしれない。なかった。

神林は、午後十時くらいに来ることになっている。今日は、千葉県の松戸で打ち合わせだと予め聞いていた。

空いている所為か、杉山の席に次々とホステスが呼ばれてくる。瞬く間に、杉山ひとりに対して、四人ものホステスが同席した。俗に言う、ハーレム状態である。もちろん悪い気はしない。四人が自己紹介を順番にした。名刺を出す者、名乗るだけの者、何か一言言わないと気が済まない者、空かさず杉山に名前と年齢を聞いてくる者、それぞれである。杉山は、一人一人に丁寧な対応をし、全員の紹介を終えた後乾杯を促した。

着替えてきた唯唯も加わり、暫くの間私を中心に談笑していた。

杉山は、持ち前のトークの上手さで、一瞬のうちに、その場の空気を和ませ、杉山のペースに嵌め込んだ。この辺のテクニックは心得ている。

杉山は、話題も豊富に持っている上に、話し方も相手を惹きこむコツを心得ているが、それ以上に彼女らが杉山に好感を持つ理由は、彼が聞き上手だからであると自負している。女の子の悩みや愚痴、興味を持った話題など、杉山自身に知識がなくとも話しを熱心に聞き、時々アドバイスをすることも忘れない。女の子にとっては、只でさえ、聞き上手なのに、その上味方のように、受け入れてもらえるとなれば、誰でも心を許す。彼女たちにとって都合のいい相手だったのである。これは、神林のトーク術でもあり、杉山は神林から学んだ。

「杉山さんて、おいくつなんですか？」

初めて席に付く香織というホステスが聞いてきた。

「いくつに見える？」

香織はしばらく杉山をじっと見つめていたが、首を捻ってから、

「三十代前半ですよ。三十一か二くらいですか？」

「当たったら何してくれます？」

その時横から口を挟んだのは前回一緒だった知佳である。

「知佳ちゃんには言っただけじゃなかったっけ？」

「聞いてませんよ」

「じゃあ、年齢当てクイズだね」

「当たったら何してくれます？」

「そうだなあ、ヨコハマインターコンチネンタルホテルのスイートルームに一泊招待してあげるよ。俺付きだけどね」

「ほんとですか？」

女の子たちの目が輝いた。

「ほんとだけど、あくまで俺付きだよ。いいの？」

「ヒントをください」

香織である。

「ヒントねえ。二十七歳で結婚して、小学生の娘が一人いる。こんなもんでいい？」

「小学何年生ですか？」

「それを言ったらわかるよ」

香織、知佳、めぐみの三人が杉山をじろじろ見始めた。同席している美香は黙ってにこにこ成り行きを見守っている。杉山は美香にウインクをして、黙っているよう口の人差し指を当てた。彼女には、前回「ダイニング・バー」で飲んだときに話しているので知っていた。

結局誰一人杉山の年齢を当てた子はいなかった。

午後十一時を過ぎた頃、神林が押っ取り刀で現れた。

「申し訳ない。業者との打ち合わせが長引いちゃってさ。すいませんね」

そう言って、神林は、杉山の左横に、ホステスを挟んでどかっ

座った。

必要以上に恐縮しているのは、神林が人を待たせるのを極端に嫌うからだ。

神林は、おしぼりで手や顔を丹念に拭いた後、作られた水割りを持ち上げて「乾杯！」とひとり呟いて一気に飲み干した。

相当喉が渴いていたようだ。

杉山の右隣には杉山と今日同伴した唯惟が、左隣には前回来店した際も同席した知佳が、その横に神林が座り、その左に神林のお気に入りのお香がいる。

杉山の正面に、香織と交代した、涼子と名乗った元モデルがいて、その右隣がめぐみと入れ替わった花梨がいる。

午後十一時を過ぎ、だいぶ客も増えてきてはいるが、それでも客二人に五人のホステスが付くのは異常とも思えた。

神林が来てからは、専ら神林が話題のインシヤチブを取っていたが、この店の好感が持てるところは、ホステス同士が客そっちのけで盛り上がらないところだろうか。これだけのホステスがいても、きちんと客の相手をするのを忘れない。もっともそれは、クラブなら当たり前のことなのだろうが。

「今日はどうだったの？」

神林がさり気なく杉山に聞いてきた。神林には、唯惟と食事に行ったことを話してある。杉山は無言で、右手の親指と人差し指で。を作って、神林の前に差し出した。神林は満足そうに大きく頷くと、あとはそっぽを向いて美香と話し始めた。

午前零時を廻ったところで、杉山と神林は帰ることにした。明日のことを考えると、あまり無茶もできない。残念がるホステスたちを残して、二人は店を出た。

翌日から暫くは、杉山も仕事が忙しかった。唯惟のことも、「カメリア・ブルー」のことも、気にはなつたものの何の進展もなく数日が過ぎていった。次に杉山と唯惟が会ったのは、二月一日木曜日

である。やはり、唯惟からのメールでの食事の誘いを杉山が受けたためだ。この時、唯惟としても、一泊する相手をもっとよく知りたいたいと思っていたに違いなく、時間の許す限り杉山と過ごそうと考えていたのだろう、と杉山自身思っていた。それだけ唯惟にしても真剣だったのではないかと思えた。

杉山にしても、デイズニールランドまでに口説き落とせたら尚いいと考えていたとしても不思議ではなく、時間の許す限り唯惟のために時間を割こうと思っていたことも事実である。だが、この日に二人が会い同伴して店に入ったことが、杉山と唯惟の大イベントに大きな影響を与えることになるうとは、二人は知る由もなかった。

この日は、時間もあまり取れなかったので、六本木で杉山がよく行くイタリア料理のレストラン「トラットリア橋本」に連れて行った。

店の雰囲気と料理のセンスには絶対的な自信を持っていて、ちょっと中心街から離れてはいるが、杉山が特に贔屓にしている大人っぽい落ち着いた店だった。

この店も、実は神林の紹介で知った。

赤ワインで乾杯し、自慢のパスタと肉料理で舌鼓を打った後、前回と同様に午後九時過ぎ「カメラリア・ブルー」に同伴した。

この日の唯惟は真つ赤なスーツだった。もちろん胸が強調されていることは言うまでもない。眩しいくらいの艶やかさである。

杉山自身は、周囲から羨望の視線を浴びて食事を取る優越感を味わっていたが、その道の人が見れば、ホステスと食事してこれから同伴することは一目瞭然であった。

誰も杉山の恋人だとは思わないだろう。それだけ唯惟が目立っていたということと、平凡なサラリーマンの杉山とは釣り合っていないことを意味していた。

この日、「カメラリア・ブルー」は珍しく混雑していた。というより、これほど大盛況な状態は杉山にとって初めての経験だった。ホステスの数も多いような気がする。最も杉山は、この日が三度目で

あり過去二回がどちらも週の頭だったので、木曜日ともなれば、こんなに客が増えるのかと呆気に取られていた。

杉山は、小さなテーブルへと案内され、席に着くと珍しそうに周囲を見回した。どこことなく、店の雰囲気違っていたからである。

マネージャーが空かさず挨拶にきた。

「いらつしやいませ。いつもありがとうございます」

たまには違う台詞が言えないものかと苦笑しながら、

「今日は随分とご盛況じゃないですか」

杉山は本気で感心していた。

「実は、姉妹店のヒズが改装工事なので、暫く一緒にやることになったんですよ」

姉妹店のヒズとは、「ヒズ・ミス」という、どちらかというとキヤバクラに近い店であり、「カメラ・ブルー」の三店舗ある系列店のひとつである。

杉山自身は、「ヒズ・ミス」へは、二年ほど前に神林に連れて行かれた記憶があるが、そのときには珍しく泥酔しており、十分そこで退散しているので、全くといっていいほど記憶にない。

「今日がその第一目なので、ヒズのお客が多いんですよ。ご迷惑をおかけしますが、宜しくお願いします」

マネージャーは、にやついた表情で気持ち程度頭を下げると、そくさと退散した。代わりに正面に座ったのは、美香である。

「今日は、神林さんと一緒にいないんですか？」

美しい笑顔だった。三十歳と聞いているが、全く見えない。超美人という表現が似合うほど整った顔立ちをしている。小さくまとまった顔に、見つめられると溶けてしまいそうなほど愛くるしい目、少しウェーブのかかった長い黒髪、身長は百五十五センチくらいと小さめだが、男の視線を釘付けにするほど隆起した胸、縊れた腰、細い足といい、体型も申し分ない。モデルでも通用するだろう。

美人好きの神林がご執心になるのは無理もない。

「神林さんとは、今日は連絡取れてないんですよ。忙しいんじゃない

いのですか」

杉山は、自分はやはり神林とセツトと考えられているのかと思いつつ、美香が神林を気にするのは当然かと、思い直した。

神林は、美香を口説こうとしている、というか、既に口説いているだろうが、美香の方はどう思っているのだろうか。神林は、男の杉山から見ても、魅力的な男だった。女の子が靡かない訳がない、と杉山自身いつも思っている。最も、杉山にとっては、そんなことはどうでもいいことだった。杉山の狙いは美香ではない。

「それにしても、混んでるね」

杉山は溜め息混じりに言った。杉山自身は、以前の落ち着いた雰囲気「カメラリア・ブルー」が気に入っていたから、多少失望していることも事実だった。正面のボックスでは、女の子が奇声を上げ、一気飲みなどもやられている。これが、「ヒズ・ミス」のノリなのである。

杉山の隣にもう一人ホステスが座った。見覚えのない子である。

「佳代です」といつてにつこり笑ったホステスは、名刺を出して、

「はじめまして、ヒズから来ました」と付け加えた。

「どうも」と挨拶した杉山の様子を見ていた美香が、

「今日からヒズと一緒にになったんですよ。杉山さんはヒズには行ったことありましたっけ？」

「一度だけ、随分昔に連れてってもらったけど、憶えてないなあ」と首をひねった後、

「一緒になった？さつき、改装工事つて、小川さんが言ってたけど小川さんとは、マネージャーのことである。」

「建前はね。不景気だから潰れたのよ」

と、美香が説明した。

確かに、「カメラリア・ブルー」時代も客はあまり入っていなかった。

五分ほど待たされて、唯唯が席にきた。替わりに佳代が呼ばれて離席した。

杉山にとっては、さっきの食事といい、今の時間といい、アンバサダーホテルで楽しく、有意義に過ごす為のプロローグであり、重要な役割でもある。もちろん、最後まで行くことを念頭においていないといったら嘘になるし、それが目当てではないと否定する気もない。彼女にしたってそうだ。男と一泊するのに、なにも考えない筈はない。相当の好きモノでない限り、誰でもいいという感覚はない筈だから、一泊を決意させるには、それなりの資格が相手に要求される筈である。つまり、杉山は唯惟の眼鏡に適ったと考えていいのである。あとは、よりコミュニケーションを取り、杉山の思惑がスムーズに運ぶよう、親密になるだけであつた。

唯惟と話すのは、初対面から今日で三回目。二人の間もだいぶ馴染んできている。杉山にとつても、最初はクラブホステスと一泊できるといふ、艶美な時間を持つ欲望から、今は、一人の女性を好きになつていくプロセスを体験しているような感覚へと、気持ちが変わりつつあることを意識していた。

五分ほどして、美香が呼ばれた。指名が入つたようだ。

十五分も話さないうちに、唯惟にマネージャーから呼び出しがかつた。

「指名？」

「わからないわ」

唯惟は、につこり笑つて、「必ず戻ってくるから、これ置いといて」と、自分の飲んでいた水割りをそのままにするよう言つて、立ち上がった。

こういう仕草が可愛いと杉山は思った。

それから暫くの間、次々とホステスが杉山の席にやってきた。どの子もみんな初対面である。きつと、「ヒズ・ミス」出身のホステスなのだろう。色々な女の子と話して気に入ってもらおうという店の配慮なのだろうが、杉山にとっては、早く唯惟を戻してくれるのが配慮というものだ、と内心思つていた。

会話もあまり弾まなかつた。唯惟の動きばかり気になっていた。

何人目かのホステスが入れ替わったあと、一瞬ひとりになった。

周囲を見回すと、客の数も今までとは比べものにならないくらい増えている。まあ、店が合併したのだから、しかも今日が初日となれば、盛況なのは当然といえば当然かもしれないが。

「この前はごちそうさまでした」

急に声をかけられて、杉山はハツとして見上げた。そこには、隣のボックスについたホステスがにこやかに笑い掛けていた。確か、花梨といったと思う。

「花梨ちゃんだったよね」

「はい」

花梨は憶えてもらっていたことが嬉しかったらしく、返事が元気だった。

「こちらこそ。随分混んでるね。忙しいでしょ」

杉山も笑いかけた。可愛い娘である。

「表情が冴えないね」

「わかります？ 今日付いたお客さんが、ヒズのお客さんばかりだったから、ちよつと疲れちゃったの」

そういうのってやつぱりあるのか、と杉山は妙に納得した。以前と全く違ってしまった雰囲気、「ヒズ・ミス」から移ったホステスと客質の所為であることは間違いない、杉山自身この状況に戸惑いを隠せなかったくらいだったのである。

「それは大変だねえ、大丈夫？」

「私を呼んで、ね？」

と言うなり、隣の客に付いた。ここまで言うのが精一杯だったようだ。

困った顔で哀願してきた花梨をみて、杉山の心が動いた。微かに杉山は頷いたが、それが花梨に伝わったかはわからない。

杉山は花梨を指名する決心をした、その矢先マネージャーが別の女の子を連れてやってきた。

「欄さんです。宜しく願います」

「欄です。よろしく」

決して美人とはいえないが、愛嬌のある大柄なホステスが隣に座った。杉山は、軽く会釈をしたが、「ヒズ・ミス」から移籍したホステスであることは一目瞭然だった。

杉山自身ヒズのホステスに偏見はないし、楽しく時間を過ごせばそれでいいと思っているが、甘ったれた言い方と、騒ぐ女は遠慮しなかった。彼女が、それに該当していたかはわからないが、相当酔っていたことは事実のようだ。

ホステスが酔うなんてけしからん、という客もいる。杉山自身は特に気にしない。

ホステスが酔わなければやってられない客もいるだろうし、上客に当たって気持ちよく飲んだ結果酔ってしまったかもしれない。それを一々咎めていたらキリがない。

彼女たちの気苦労もわかってやりたい、と常々杉山は思っている。欄と名乗ったホステスは、杉山の隣に座るなり、客はそうすればみんな悦ぶとも思っているかのようになり、体を密着させてきて、杉山の体に触れる。店を勘違いしているんじゃないかと思いたくなるが、客によつては、それが嬉しい輩もいるのである。ある意味で、客の心理を突いていると言えなくもないが、全ての客に当て嵌まると思つているところが、まだまだ甘い。

杉山は身を引いて欄と名乗ったホステスを迎え入れた。

欄は、杉山のそんな態度もお構いなしに、ますます体を寄せてきて、

「いい男ね」と言つて、顔を寄せてきた。もしかしたら、彼女の前職はファッションヘルスか何かではないかと、杉山は感じたが、もちろん声には出さない。

暫くの間、欄に押されつ放しだった杉山の心中は、別の意味でドキドキしていた。こんなところを、別の席に付いている唯惟に見られでもしたら、きつと節操のない男だと思われるに違いない。杉山は、気が気ではなかった。

そのうち、隣のボックスで詰まらなそうに接客していた、花梨が席を立った。フロントの方に消えたのを、杉山は目で追って、指名してやらなきゃなあ、と感じていた。

五分ほどして、マネージャーが杉山に近づいてきて、

「欄さん、お願いします」と呼びかけた。随分早い交代である。欄は少し不服そうに口を尖らせたが、「ごちそうさまでした」と言つて、席を立った。

杉山が大きな溜め息とともに、胸を撫で下ろしたのは言うまでもない。

次の瞬間、花梨が戻ってきて杉山の隣に滑るように腰を下ろした。「逆指名しちゃった」

ぺろつと舌をだして、につこり笑った花梨を見て、杉山は驚いた。「逆指名？ そんなことをできるの？」

「わからないけど、しょうがないでしょ。ここがいいんだから」駄々をこねるように、しかし甘えるような言い方ではなく、拗ねたような言い方に、杉山は驚きを隠せないでいた。

「なんでそんなにここがいいの？」

「だって、この前ご一緒した時、話がすつごく面白かったし、私の中では、好感度ナンバーワンですよ」

お世辞だとは思うが、ここに付いたことを心から喜んでいるのは確かだろうだ。

「そんなに面白かった？」

杉山だってそこまで言われて悪い気はしない。むしろ、女の子にここまで言われて、しかも指名料も入らないのに、逆指名までして自分といたいなどと言われて、浮かれない方がおかしい。杉山はすっかりいい気分になっていた。

「話が面白いだけじゃなくて、勉強にもなったし……。それに、杉山さんて紳士的だったから」

随分な誉めようである。杉山は照れ笑いをしながら、前回の話の内容を思い出していた。

花梨は、二十一歳で、今年の初めに札幌から上京してきたという。四月から服飾の学校に通うためだ。札幌では、やはりクラブホステスをやっていたらしく、若いわりには、しつけはしっかりとしていた。年齢が二十五歳くらいに見えるのは、顔立ちが大人っぽいだけでなく、雰囲気落ち着いている所為でもあるようだ。身長は百六十センチくらいだろうか、意外に高く見える。髪は肩から少し垂らした辺りまで伸びていてストレート、少し茶色がかっているが、染めている訳ではなさそうだった。体格は少し太め、といったら本人は怒るだろうか。杉山にとっては、正に理想的な体格なのだが、おそらく本人は不満なのだろうと思われる。張りのある豊かなバストが、スーツの下に着ている白のキャミソールを窮屈そうに持ち上げている。

今日は、ピンク色のスーツを着ている。膝上五センチくらいの短いスカートは、座ると太腿までが露出し、杉山の目を奪った。若さと豊富な姿態に魅せられた訳でもないのだろうか、天真爛漫な彼女の性格と接しているうちに、自分の心が和んでいくのがわかった。唯唯とは違う、自分を素直に表現できる相手、気を遣わずに、自然体で接することが出来る相手、そんな印象を花梨に抱いていた。

杉山にとって、外見も内面も理想的なタイプかも知れなかった。

花梨は、自分から逆指名をしただけあって、随分と長く杉山の席にいた。途中、マネージャーが、花梨を場内指名に入れていいかと聞きにきたが、杉山は躊躇うことなくあっさり了承し、その代わり、最後まで自分に付かせることを承諾させた。

実際、花梨は楽しそうだった。さっきまでの硬い表情はもうない。ホツとして、のびのびと仕事をしているように、杉山には映った。いや、仕事をしているという感覚も失っていたかもしれない。

杉山は、例え酔っていたとしても、普段そういうことはしないのに、いつの間にか花梨の手を握りしめ、体を寄せていた。花梨にしたら、嫌がっている素振りはない。

それは、唯唯には絶対しない態度だった。唯唯という時間よりも、

花梨と過ごした時間の方が遙かに短いのに、唯惟に対するよりも花梨の方が自然に振舞えた。

「私のなかでは、杉山さんは結構好き！」

「ほんと？ 嬉しいこと言ってくれるけど、気に入ったお客さんみんなに言ってるんじゃないの？」

杉山は、照れ隠しにそう言った。花梨は、口をとんがらして拗ねたように、

「私がそんな風な女に見える？ ねえ、お世辞をいうような女に見えるの？」

花梨に覗き込まれて、どぎまぎしながら、杉山は首を振った。確かに、お世辞や冗談をいうような女ではなかった。はつきりとモノをいい、嫌なものは嫌、駄目なものは駄目と、たとえ相手がお客であろつとも、言ってしまうような女なのだ。現に、さっきまで、詰まらなそうな表情を露骨にしていたのだ。そんな純粹なところを持った女だからこそ、杉山は惹かれたのだ。

唯惟とは明らかに違っていた。プロ意識に欠ける、と言ってしまえばそれまでだが、彼女の口から出る台詞は、単なるリップサービスではないような気になるから不思議だった。これで、策略的に言っているとしたら、杉山など足元にも及ばない相当なタマである。

「じゃあ、好きの上はなに？」

少し意地悪な質問だったかな、と杉山は思ったが、是非訊いてみたい質問だった。

「好きの上は・・・」と言って、花梨は握っている杉山の右手を開いて、指を折り始めた。

「大好き！ かな。その次は、すっごい好き！ で、その次がラブだね」

随分先がある。杉山は少しがっかりした。本気で落胆していた。

「まだまだじゃない」

「そんなことないよ。好き！ なんだよ。他の人よりはずっと上にいるじゃん。それに、すっごい好き！ とラブはほとんど変わらない

い。杉山さんは、好き！でも、大好き！に近い好き！なんだよ」
「なんだか、男心をくすぐられているような気分になってきたが、決して不快ではない。」

「今日時間取れる？」

「今日って、お店が終わった後っていうこと？」

少し怪訝そうに聞き返してきた花梨の態度を見て、アフターに誘おうとした自分が愚かだったと悟った。ちょっと調子に乗りすぎたようだ。あまりに花梨が好意的な態度だったので、我を忘れて誘ってしまったのだ。オーケーするはずがなかった。

「ごめん、花梨ちゃんみたいな人気者が急に時間とってって言うって取れるわけないよね」

「そんなことないよ」

「でも、俺なんかとアフターする気なんてないでしょ」

花梨はくすりと笑ってから、

「杉山さんて、凄く謙虚みたいだけど、もっと自信持っていていいと思いますよ。絶対もてるはずだから。ちなみにあたしは杉山さん意外の人とはアフターする気はないけど」

「ほんと？　じゃあ、今日誘ってもいい？」

「変な誘い方だけど、杉山さんらしいかな。唯唯さんはいいんですか？」

「えっ？」

杉山はハツとした。そうか、自分は唯唯の客なのだ、そう周りの人たちは認識しているのだ。花梨と話していてすっかり失念していた。

「特に約束はしてないんだけど、こういうのってまずいの？」

「約束していないのなら大丈夫ですよ。同伴とは違うので」

「今日は最後までいるつもりだから、終わったら御飯でも食べにいいこう？　もっといっぱい話したいんだ」

花梨は少し考える顔をしてからにこっと笑って、

「いいですよ。連れてってください。但し唯唯さんのおまけじゃ嫌

ですよ」

「そんな失礼なことはしませんよ」

「じゃあ行きます」

杉山にはとても珍しいアフターの申し出であった。しかもオーケ
ーが取れたというのは、杉山にとっては奇蹟に近い。

しかし、杉山自身浮かれ過ぎていて、本来の目的を忘れていたの
だ。そして、再三神林が言っていた、こういう店で飲む場合のルー
ルを杉山はすっかり忘れていたのである。

「一軒の店で複数の女の子を狙っちゃダメだぞ。どっちもダメにな
るからな」

こういう状況に慣れていない杉山には無理もないことかもしれな
いが、このあと杉山には大きな屈辱が待っていたのである。

そのとき花梨に呼び出しがかかった。

「ごちそうさまでした。あとでまた来ますので、待っててください
ね」

耳元でそう囁いて、花梨は離席した。もっと側にいさせたかった
と杉山は悔やんだ。なんて気持ちのいい子なんだろう。変にすれて
いないが、田舎臭くもない垢抜けた子だった。素直に自分を表現し
ている無邪気さが、杉山にとって新鮮に映った。

少しずつだが、確実に杉山の心の中に、花梨がつぼみを膨らませ
始めていた。

【続く】

第3章 それぞれの思惑

第三章・それぞれの思惑

「いよいよだけど、心の準備はできてるの？」

にやにやしなから、杉山直樹の心臓の辺りを人差し指で指して神林幸一郎が言った。

二月七日の午後七時を少し廻っていた。新橋の小料理屋「京華」で落ち合った神林と杉山は、とりあえずビールを頼んでから、早速神林がその話題に触れてきた。

小料理屋「京華」は、十人くらい座れるカウンター席と、四人用のボックス席が五つくらいと、あまり大きいとは言えない居酒屋風小料理屋である。

杉山は、神林と初めてここに入って以来、たまに会社の同僚や部下と寄ることがある。もちろん、神林ともよくくるので、店の女将には顔馴染になっている。

新橋から、烏森どおりを虎ノ門方面に少し歩いて狭い路地を右手に入った、目立たない店である。こぎれいな店構えで脱サラした中年夫婦がふたりで営んでいる、家庭料理の店である。穴場的な店なのでいつでも案外空いているし、落ち着いて話せるので、二人にとってはお気に入りの店のひとつだった。料理の味も悪くない。

この日も、午後七時過ぎにもかかわらず、店の中には、二人の他に二組しか客はおらず、静かな雰囲気だった。

ふたりは並んでカウンターに座った。カウンターの方が落ち着く。ビールで乾杯した後、二、三品の料理を頼んで、神林が話しの続きを蒸し返した。

「あれから、唯唯ちゃんとは会ってるの？」

彼のいうあれからとは、二月一日のことを指している。

杉山は、唯惟とのことは神林に逐一報告していた。報告というより相談に近いかもしれない。唯惟から意外な申し出を受けたときも翌日には早速神林に事の経緯を話し、彼女の真意とその対応を相談したわけだが、もちろん神林の答えはのるべきだと断言していた。

女性経験の浅い杉山にとっては、神林の存在と意見は貴重なものだったから、彼にはすべて話している。

ただひとつを除いては…。

「何度か店にいきましたよ」

「同伴？」

「いえ、ここんとこ忙しくて同伴まではちょっと・・・」

神林は、それでも着々と進展する二人の関係に満足そうに頷いていた。だが、その反面杉山の表情は徐々に曇っていった。事實は少し違っていた。唯惟からの食事の誘いは、たびたびメールを通じて入ってきたが、仕事が忙しいことを理由に同伴はしていなかった。但し、「カメラア・ブルー」へは何度か足を運んだ。行けば必ず唯惟が付く。そんなことは百も承知である。杉山は唯惟の客という認識を店側も持っているのだから。しかし、実際杉山が店に足を運ぶ理由は他にあった。

「時々思ふことがあるんですけど。彼女、本気なんですかね？」

まだ信じられないといった風に杉山は顔をしかめた。

「まだそんなことを言ってるのか」

しょうがない奴だ、と言いたげに神林は首を振ってビールを煽った。

神林が何か言おうとした時、「お待ちどうさま」と言って女将がホタルイカの沖漬けと刺身を運んできた。その時ついでに神林が熱燗を頼んだ。

「あんまりこういう経験がないもので、どうしたものか戸惑ってます」

正直に今の気持ちを杉山は吐露した。

「いい機会だから、こういうケースでの女とのつきあい方もあるってことを覚えておいた方がいいんじゃないか」

「こういうケースのつきあい方がいかにも得意な神林が説くように言った。」

「相変わらず、随分簡単に考えていますよね」

杉山は半ば呆れて言った。

「失礼なことを言うなよ。簡単に考えているわけじゃないぞ。男と女がつきあうきっかけなんて、その辺にごろごろしてるってことだよ。昔から杉ちゃんも女とつきあうってことを結構重く考えるだろう？ だから相手が引いちゃうんじゃないのか。もっとフランクに捉えていけば、美味しい目にも合えるってことじゃないのかな。どういう成り行きでその何とかっていうホテルに泊まりに行くことになったのか、俺にはわからんけど。唯惟ちゃんは、お前のことが気に入ったから一泊するっていったから、敢えてそれを疑うことはないだろう？」

「疑っているわけじゃないんですけど。何ていうか、あまりにも簡単に決まっちゃったんで、本気と思えなくて」

「彼女は簡単に決めたわけでもないだろうさ」

「男と一泊するってことが何を意味してるのかってことくらいわかってますよね」

「そんなこと当然だろ」

決まりきってことを聞くな、とばかりに神林は言い放った。おそらく、杉山が何をそんなに疑問に思っているのか、神林には見当もつかないのだろう。

「遊びじゃないんですか？」

「遊びでもいいじゃないか。それとも、おまえは唯惟ちゃんと一泊するので、結婚を前提にお付き合いをしましょう、なんて言っただろうな。おまえの悪い癖はそこなんだよ。いつも真剣勝負じゃないと気が済まない、その恋愛志向が相手をヘビーにしちゃうんだ。結構重いぞ、その考えは」

神林は既婚者だ。外で女とつきあうのも全ては遊びの域を出ない。彼自身、家庭を壊すつもりなどさらさらなく、だからといって女を軽く見ているわけでもないのだ。

「でも、遊びで男に抱かれるなんて…」

「ただの遊びじゃないだろう」

「そうですか？」

「当たり前だ。彼女はお店休んで、次の日会社休んでまで、お前につきあうんだろう？ただの遊びだったらそこまではしないぞ」

神林は力強く説得口調で言い放った。神林の中には、うまくいっている杉山を励ますと同時に羨望の意味もあることは確かだった。神林にしてみれば、随分前からお気に入りの美香を口説いているのに、いっこうに埒が明かない現状に多少焦りがあるのかもしれない。しかも、今回のことで杉山に出し抜かれたという思いが強くあったに違いない。それなのに、愚図愚図言っている杉山の煮え切らない態度に切れるのも無理はなかった。もっとも、神林は友人の朗報を妬むような男ではなく、むしろ応援するような性格なので、そういう意味で彼が杉山に切れることがある。

「彼女の頭には、アンバサダーホテルに泊まるっていうことしかないのかも知れないし…」

杉山は、懲りずにまだ愚図愚図言った。というより、あまりにも上手く行き過ぎているので、裏切られた時のためにあらゆる可能性を考えていたのである。

杉山はそういう性格なのだ。

神林にしてみれば、杉山の昔から弱気になるこの性格に嫌気が差しているに違いなかった。何故、もっとポジティブに考えられないのか信じられなかった。

「いくらその何とかってホテルに泊まりたくても、好きでもない男と一泊するほど、彼女たちだってひまじゃないぞ」

俺だって・・・と呟くように言ったのは、杉山には聞こえていなかったが、やはり美香のことにこだわっていることは明白だった。

「一泊することが決まってから、唯惟ちゃんは食事に何度も誘ってきたんだろ？　それが真剣な証拠じゃねえか。ただ単にそのホテルに泊まりたいだけなら、当日までおまえとは会わないぞ。違うか？」

違うか、と言って神林に覗き込まれると、自然に首を振るしかなくなる。確かに、神林の言っていることは正しい。

「唯惟ちゃんの名前知ってるのか？」

神林が急に話題を変えた。

「ええ」

「何ていうの？」

「確か、山崎由紀子だったと思いますが」

「いつ聞いたの？」

「最初に会った時ですけど」

神林は感心したように、にやつと微笑むと、

「やること早いなあ。俺なんか美香の本名知ったのはついこの前だぞ。ちゃんと情報は取ってるじゃないか。感心感心」

「それはどうも」

照れくさそうに杉山は頭を掻いたが、逆に神林にしては美香に対しては慎重すぎるような気がして、杉山自身おやつと思った。

「神林さんの方はどうなっているんですか？　もうやつちやいました？」

杉山は気分を変えるために神林のことに話題を摩り替えて茶化した言い方をした。確かに、神林の美香に対する気持ちは今までの相手とは違っていた。何年か前に神林とつるんでいた頃は、彼が気に入った女で振り向かない女はいなかった筈だ。それほど彼はモテた。杉山と違って神林が女で苦勞したことはなかったと記憶している。もちろん女のことと相談を受けたことなどただの一度もない。ところが今回はどうだろう。あの自信家の神林が美香にてこずっているというより、これほどまでに、熱く、一生懸命に一人の女に執着する神林の姿を杉山は初めて見た気がする。それほど、神林にとって

美香の存在が大きいのだ。

杉山にとって、神林とこうして昔のように飲み歩くのは久しぶりだった。この何年かの間に彼の女性に対する思考回路が変化したのだろうか。

杉山は、神林の美香に対する気持ちが羨ましかった。

自分は、唯唯に対してそこまでの気持ちを持っているのだろうか。美人のクラブホステスと一泊できる。それだけのことに価値を見出していないだろうか。実はそこには愛も真実も存在しない、単なる見栄もしくは他人からの羨望を楽しんでいるに過ぎないのではないかと、ふと神林を見ていて感じてしまっていた。ただ、そう感じる理由が他にもあった。

花梨の存在である。そのことを神林に話そうかどうか杉山は迷っていた。杉山のなかでは花梨の存在が膨らみつつあり、むしろ唯唯よりも気になる存在になっていることは確かであり、そのことは杉山自身も自覚していた。

女と一泊するということの重大さ、責任を強く感じている杉山としては、迷いが生じている以上このまま予定どおり進めることに抵抗を感じていた。

だからこそ、唯唯が本気なのか遊びなのかが問題になってくるのだ。

「実は・・・」と言いかけたところで神林が、

「彼女とは手ぐらいい握ったんだろ？」

「えっ？ 誰と？」

「誰って、唯唯ちゃんに決まってんだろ。他にも手を握りたい相手がいるのか？」

「い、いえ・・・」

杉山は、花梨のことを考えていたので一瞬神林にそれを見透かされたかと思いいどろもどろになった。神林にしてみれば、杉山の生真面目な性格を考えると、唯唯以外に想いを寄せる女がいるなどとは思っても寄らなかっただろう。

「行くまでに、キスぐらい迫ってみれば？」

冗談ともつかず神林が冷やかした。話がまた杉山の事へ逆戻りしていた。

神林にしてみれば、杉山と唯惟の組み合わせは、神林自身が取り持ったようなものだから嬉しくないわけがないし、唯惟と美香は親友だから自分と美香が親密になるきっかけにならないとは限らない。是非ともこの二人はまとめる必要があった。

「おまえはいざという時に奥手だからいかんよ。向こうも待ってるかもしれないんだよ」

そうは思えないが、と口に出そうになったのを杉山はぐつと堪えた。

「これでいいか？」

「ええ」

杉山のビールが空になったのを見定めて、神林が杉山のお猪口に熱燗を注いだ。杉山は、ゆっくりと刺身を口に入れながら花梨のことを神林に話そうか迷っていた。唯惟と一泊デートの約束をしておきながら他の女に興味を示すなんて、ましてその相手が同じ店のホステスだしたら、いくら神林といえども軽蔑するに決まっている。杉山が話すべきか迷っていると、

「随分浮かない顔をしてるじゃないか。まだ悩んでいるのか？ 大丈夫だよ。もっと自分に自信持つていいんじゃないのか？ おまえは自分で思っているよりずっとモテるんだよ」

と、神林が励ましてきた。

「それとも、何か別のことで悩んでるのか？」

相変わらずカンのいい男だと杉山が感心した瞬間、神林の口から思いがけない台詞が飛び出した。

「花梨とかいう子が気になっているんだろう？」

「えっ、」

杉山は狼狽した。

「な、何を言い出すんですか」

「誤魔化すなよ。何年おまえとつきあっていると思ってるんだ？」

神林は、我が意を得たりとばかりに頷きながら言った。

「実はな。美香がオレに言ってたんだよ。杉山さんは最近お店で花梨ちゃんと仲良くしてるけど、唯惟ちゃんとかあったのかねって。美香は唯惟とお前に何かあったんじゃないかって心配してたけどな、俺はそれを聞いてピンときたんだよ」

「……」

「おまえが唯惟ちゃんと喧嘩するとは思えんし、おまえは自分の気持ちに正直に行動しちゃう奴だから、唯惟ちゃんとのことでこんな大事なときに、敢えて他の女と仲良くするってことは、そっちに関心があるってことだろう？」

「そ、それは……」

「それは、何だ？ 花梨ちゃんと同伴もしたそうだな？ そんなことオレに一言も言わなかったけど、どうなってるんだ？ おまえ、

実は花梨ちゃんの方に気があるんだろ？」

神林に詰め寄られて杉山は話す覚悟を決めた。

そう、確かに一度花梨と同伴していた。杉山の方から誘ったのだ。二月五日のことだ。この時は銀座で寿司を食べた。神林はおそらく花梨のことをよく知らない。店で面識はあったにしても話したことはないだろう。花梨の良さを知らない神林に話していいものか杉山は不安だった。果たして神林にオレの気持ちが理解できるだろうか？ と杉山は思った。どこから見ても杉山に正当性はない。今自分は花梨に夢中だと言ったら、きっと神林は呆れるだろう。いや、「おまえ何考えてんだ！」と叱責するに違いない。

杉山は、別に自分を正当化しようとは思っていなかったが、神林にだけは自分の気持ちを理解してほしかった。そのためにはどう表現したらいいのか。

「おい、黙っててもわからないだろう。唯惟ちゃんと喧嘩をしたわけではないだろう？」

「いえ、そんなんじゃないですけど……」

「じゃあ、やっぱり、花梨とかいう子に惚れたんだ？」

杉山は黙っていた。沈黙が肯定を表していたのだ。

神林はあんぐりと口を開けて、杉山を凝視していたがやがて笑い出した。

「おまえは昔からそうなんだよな。上手くいつてるんだから、とりあえずモノにしちゃえばいいのに。いつもリスクの高い方ばかり選択して、結局上手くいかないんだよな」

そのとおりだった。上手くいきかけても、必ずそれを駄目にする。杉山はいつもそうだった。

「杉山らしいよ。で、自分の中ではどうしようと思ってたんだ？」

神林は怒ってはいなかった。呆れていることは確かだろうが、杉山の性格と今までの経験を知っているだけに杉山の気持ちも理解できたし、できれば杉山にとって一番いい方法を取りたいと考えていたのかもしれない。

「花梨ちゃんて、どんな子だったかなあ」

神林は思い出すように宙を見上げた。

「憶えてないなあ」

諦めたように視線を杉山に戻すと、

「花梨ちゃんは、おまえをどう思ってた？ おまえは好かれていたのか？」

神林は杉山を覗き込んだ。

「いえ、多分いいお客ぐらいにしか思っていないと思いますが・・・」

「それでも、花梨がいいのか？」

杉山は黙って頷いた。

「ほんとにしょうがない奴だな。もったいないことばかりしてる」

神林の口調は優しくかった。普通に考えると、自分が紹介した女とせつかく上手くいき掛けているのに、リスクを背負ってまで、しかも自分の紹介を裏切ってまで他の女のところへいけば腹が立って当然である。

「おれの顔を潰したな」くらい言われても仕方がないのだが神林は

そうではなかった。彼はいつも、自分が損をしても、自分が迷惑しても杉山の幸せを考えていてくれるのだ。常識さえ外れていなければ、彼はとことん杉山に協力することを惜しまなかった。神林はそんな男だった。

杉山は、神林に花梨との出来事を初めて話した。

二月一日に逆指名されたこと、その日アフターして飲んだこと、そして一昨日ついに同伴までしていたことなど、神林にとっては初耳だった。

「たぶん自分の気持ちは、もう花梨の方にあるんです」

「そうみたいだな」

「でも、唯唯さんの気持ちを考えると、そんなに邪険にできなくて・・・アンバサダーに行くっていうのは前からの約束だから・・・きつと彼女も楽しみにしてると思うし」

これが杉山の優しさであり、優柔不断なところなのだ、と神林は思った。もし自分だったらどうしていただろうか？おそらく神林自身だったら、狙った女が途中で変わるということはないが、万が一杉山の立場になったら確実な方を射止めるだろうな、と考えた。いや待てよ。やはり杉山と同じかも知れない。リスクを背負っても、好きな女にいくかもしれない。今がまさにそうだった。だからこそ杉山を責められないでいるのだ。杉山の気持ちはよくわかるからだった。

「こんな気持ちのまま、一緒に泊まるなんてできませんよね」

杉山はこのまま辞めてしまうのは惜しい気がしないでもないが、花梨とのかを考えるとここは引き際ではないかと思えた。というよりここで唯唯と上手くいっても、杉山自身の気持ちが既に花梨にあるとしたらそれはあまり意味がないことになる。だからといってここで唯唯にはつきりと断りきれないでいるのは、唯唯に未練があるというよりも、花梨ひとりに絞ったところで花梨と上手くいくとは限らないので、順調にいつているものを敢えて壊す気にはなれなかったのも事実だった。

二人を天秤にかけているつもりはないが、まだどちらかを真剣に愛しているわけではない以上、絶対片方に絞らなければならぬということはない。だからといって、両方に手を出して両方とも失うことだけは避けたかった。もつとも、両方と上手くやっていくほど杉山は器用ではなかったしそんな気概もない。

俺は一体どうしたいんだろう？ どちらを望んでいるのだろうか？

杉山は自問自答して、自身の本心を探った。

唯惟のことも決して嫌いではない。しかし、日に日に花梨に惹かれていく自分がいることも認めないわけにはいかなかった。

「同じ店で二人の女を追いかけるのはトラブルのもとだぞ」

「ええ」

そんなことは承知していた。だが、感情は抑えられない。

「待てよ。ものは考えようだぞ。唯惟ちゃんとお泊デートすることによって、唯惟ちゃんとおまえ自身の本当の気持ちを確かめるチャンスじゃないのか。つまり、おまえ自身が本当はどっちを好きなのか、がはっきりわかるだろし、唯惟ちゃんも本当はおまえをどう思っているのかわかるだろ？」

「そんな、人を試すようなことできませんよ」

「試すんじゃない。確かめるんだ。唯惟ちゃんの本心、おまえの気持ち、そして花梨ちゃんのおまえに対する気持ち、全部わかるだろ？」

「花梨の気持ち？」

「ああ、おまえと唯惟ちゃんが一泊したのを知っても平然としてたら脈なしだよ。怒るようならおまえに惚れてる」

「簡単に言わないでくださいよ。そんなことオレにできるわけないでしょう。それに、花梨に一泊したことを話すんですか？そんな危険なことできないでしょ。たとえば、花梨がそのことで怒ったとしても、そんなときはもう手遅れじゃないですか」

「手遅れかどうかはわからないが、かなりリスクなことは確かだな。もしかしたら、花梨ちゃんと上手くいくところを駄目にしてし

まう可能性もある」

「それじゃ意味ないでしょ」

「そんなときは、唯惟ちゃんに絞るんだな」

「そんな風に割り切れるものでもないでしょ。真面目に考えてますか？」

「考えてるさ。そもそも、こんなことになったのはおまえが唯惟ちゃんひとりにしとけばいいのに、花梨ちゃんにも色目を使ったりしたのが原因だろうが」

杉山に真面目に考えろと叱責されて、神林は面白くなさそうに口を尖らせた。彼にしてみれば、今日は、杉山にアンバサダーホテルでの一夜を成功させるための、作戦会議のつもりで呼び出したにもかかわらず、面倒な問題を投げかけられ、拳句の果てに真面目に考えろと叱責されるに至っては、いくら親友とはいえ腹が立って当然といえた。

神林は、お猪口のぬるくなった酒を一気に煽って徳利から手酌で酒を注いだ。

杉山もふて腐れたようにお猪口の酒を一気に煽った。喉がかつと熱くなり、あわてて刺身を口に入れた。

神林は、喋りながらも手酌で徳利の酒を一人で飲んでいる。もう三本目だった。その間、杉山がお猪口を口に運んだのは二度だった。「唯惟さんとは最初のきっかけが、僕に言わせればいい加減だったような気がして、ちよつと抵抗があるんですよ」

「そんなものは、おまえの勝手な解釈であって、出会いの理想像みたいなものを少女マンガみたいに描いちゃっているにすぎないんだよ。男と女の出会い方なんてな、ナンパあり、合コンありで、酔った勢いでやつちゃって、そっからつきあうなんてケースごろごろしてんだよ。わかるだろ？」

「そんなことはわかってますが……。何か釈然としないんですよ」

「相手が花梨ちゃんだったら釈然とするのか？」

痛いところを突かれたと杉山は顔をしかめた。相手が花梨だったら、果たしてこんなにまで悩むだろうか。

「花梨のことはこの際置いて、唯惟さんがそんな軽い行動を取るとは思えないから、もし本気で行くとしたら結構重い意味があるんじゃないかって思えてきたんですよ」

「それは正直わからんことだ。唯惟さんが尻の軽い女かどうかは俺は知らないが、少なくともおまえと一泊してもいいと思っっていることは確かだろ？ そのあと二人がつきあい出すのか、それっきりで終わるのかはふたり次第なんじゃないの？」

「順番が逆ですよ」

「順番？ なんだそれは」

「恋愛の順番ですけど・・・」

神林は吹き出した。

「何を言い出すのかと思えば、随分幼稚なことを言ったもんだ。中学生でもそんな発想しないぞ。おまえどうかしてるんじゃないのか」

「中学生以下ですか」

「よく考えてみろよ。気に入ったからセックスした。そのあとつきあいだした。つきあっていくうちにお互いに欲しくなったからセックスした。おんなじことじゃないのか。セックスが先だといけないのか？ それは偏見というものだぞ」

神林の言うことには説得力がある。彼の言うことはもっともだった。反論の余地がない。杉山にしたって、それは十分承知していることだった。なのに、これほど抵抗するのは一体何故なのか？

「それに、おまえたち実質もつきあってるようなもんじゃないの？ 何度もメシ食いに行つて、今度一緒に泊まるのは、それを確かめるためなんじゃないのか？」

そうかもしれない。普通に考えればそうなのだ。

「花梨ちゃんのことがあるから躊躇ってるんじゃないのか？」

ズバリそのとおりだった。神林に言われるまでもなく彼女の存在が杉山を躊躇させていたのである。

「さつきも言ったが、花梨ちゃんに絞るなら今回は辞めたほうがいいぞ。しかし、花梨ちゃんがどうなるのかわからないんだったら、これはチャンスなんだから断るのはもったいない気がするけどな」
「行っても何もなければいいじゃないか」

「それはないだろう。あり得ない」

神林はきつぱりと断言した。

「そうでしょうか？」

「おまえが何もしなければ何もないよ、当たり前の話だが。でも、唯唯ちゃんに失礼だぞ、それは」

「彼女はそんなこと望んでいないかも」

「それはないよ。一泊するんだぞ。ガキじゃあるまいし。男と一泊するのになんか考えていませんでしたなんてことあるか」

神林は断定的に言った。確かに密室で男と二人っきりで過ごすのだ。覚悟は出来ているはずである。

杉山は考えるように腕時計に目を落とした。午後十時を過ぎていた。

「やっちゃったら花梨ちゃんは諦めるんだな」

そう言って神林は、「熱燗もう一本お願い」と奥に声をかけた。しばらく沈黙が続いた。女将が熱燗を持って近づいてきた。

「何やら深刻なお話でもしているの？」

「そう見える？」

神林が女将から酌をしてもらいながら答えた。

「またふたりで悪さでもしようって話しあってたんでしょう？」

今度は杉山にお酌をして、カウンターテーブルに徳利を置いた。

「まあ、ごゆつくり。あんまり女泣かしちゃダメだよ」

そう言つと、さつさと奥へ消えて行った。

「美香さんとは何とかなりそうなんですか？」

杉山が神林の話題に摩り替えた。というより、杉山は杉山なりに、神林と美香のことを心配していた。

「どうにもならないなあ」

「僕の心配している場合じゃないですね」

「てつきりそっちが順調だとばかり思っていたから、おれの方を手伝ってもらおうと思っていたんだ」

「すいません、ご期待に添えなくて」

杉山は済まなそうに頭を下げた。

「いいよな、おまえは。黙っててもあんな美人が手に入るんだからなあ。羨ましいことなんだぞ」

神林は杉山を小突いたが、杉山はそれを無視して、

「今日はこの後どうするんですか？」

「行くか？ 花梨ちゃんに会いたいだろ」

結構な皮肉である。

「唯惟さんに会いにいきましょうか」

逆らうようにそう言って杉山は伝票を手にした。

この問題は、結局は自分で決めなければならないことであり、それは少なくとも二月九日までには決断しておかなければならないことだと私は思った。

杉山直樹と神林幸一郎が議論をしていたちょうどその日、唯惟こ
と山崎由紀子と美香こと佐藤美香も、西麻布の居酒屋で会っていた。
美香が由紀子を呼び出したのだ。

由紀子も美香も昼間は普通のOLである。この日の午後、美香が
由紀子にコンタクトを取り、西麻布の居酒屋「月の光」で午後六時
に落ち合った。

二人とも「カメラ・ブルー」の入店時間は午後九時である。話
をする時間はたっぷりある。

由紀子はアパレル関係の会社でデザイナーを、美香は不動産関係
の会社でコンサルタントをしていた。二人が水商売に足を染めたく
っかけは定かではないが、二人とも水商売の水が少なからず合っ
ていることは確かである。

居酒屋「月の光」は、二十人くらい入ると一杯になってしまいうな小さな店だが、和食の美味しい店として雑誌などでも紹介されたことがある。店内は、女性客をターゲットにしているだけあって、居酒屋とはいえ、洒落た造りの店構えと、多彩な料理のバリエーションとで女性の人気を取っている。

値段も安いのが女性にとっては嬉しい。

二人がプライベートで会うことは珍しいことではない。同じホステスとして、またOLとしても気が合うのだろう。

美香はビールを、由紀子はワインを飲んでいる。つまみは、シーフードサラダとポテトフライ、この店の名物すきやき風春巻の三品を頼んでいた。

美香は酒が入ると料理はあまり食べない。一方由紀子の方は、一体どこに入るのか不思議に思えるほどよく食べる。この日も、昼間の仕事ハードだったせい食欲旺盛だった。

「最近、本職が忙しそうね」

美香が、由紀子の身体を気遣うように言った。

「ちょっと部下がトラブっちゃってね。尻拭いが大変なのよ」

由紀子は大きな溜め息とともにワインをぐつと煽った。二人とも酒は滅法強い。

由紀子は、会社では四人の部下を持つプロジェクトリーダーである。

「何とかなりそう?」

「ぜんぜん、問題ないわ。どうにかなるでしょ」

結構暢気に構えている。A型なのにO型っぽい性格である。

「そうじゃなくて、九日は大丈夫なの?」

美香は一層身を乗り出して、

「ちゃんと行かれる?」

「気が気でない感じである。」

「ああ、そのことか」

杉山とアンバサダーホテルに行くことは美香だけには言っている。

相談というより、自慢に近い言い方をしたので美香に妬まれた記憶がある。

「そのことか、じゃないでしょ。結構心配してるんだから」

「心配してるって何を？」

由紀子はきよんととして首をかしげた。由紀子にしてみれば、美香が何をそんなに懸念しているのか不思議だった。

「何か心配事でもあるの？」

由紀子が、はつとして不安げに聞いた。杉山のことを神林を通じて美香が何か聞いているのかと心配になったのである。

「あなたのことを心配してるのよ。ほんとに行くの？」

「どういう意味？」

由紀子は、意味がわからないといったふうに首をかしげながら聞き返した。

「由紀ちゃん、杉山さんのこと好きなの？」

美香が聞きたいのは実はこのことだった。二人がつきあうのは決して悪いことではないし、むしろ祝福したいほどだ。だが、実際は何か釈然としない。それが何故かはわからないのだが……。

「好きかどうかはまだわからないけどとってもいい人よ。好きになる可能性がないわけではないわ」

「でも、一泊するんでしょう？」

「ええ」

それが何か、と言わんばかりに由紀子は頷いた。

美香には、由紀子の考えていることが理解できなかった。美香の知る限り由紀子は決して軽い女ではない。簡単に男と泊まったりするような子ではないのだ。それなのに、今回は簡単に男と一泊する約束を交わしている。その気持ち美香には理解できなかった。しかも、今聞いたところによると、はつきり「好き」と認識しているわけではないようだ。

「好きでもないのに、一緒に泊まるの？」

「全然好きじゃないわけじゃないわ」

「でも、つきあっているわけじゃないでしょ？」

「だって、杉山さん、なかなか取れないアンバサダーホテルの、しかもスイートを取ってくれたのよ。シェフミッキーだって予約したんだから。凄いいと思わない？」

由紀子は、輝いた目を美香に向けて何度も凄いい凄いと呟いた。

「あなたの身体だけが目的でそうしたのかもしれないじゃない」「いや、そうに違いない。」

「そうかもしれないわね。でも、そうだったとしても普通の男はここまではやらないわ」

確かに一泊二日のデートに、しかも泊まるだけで十万円のスイートルーム付きは相当惚れ込んでいなければできない行為だ。

「ここまでやってくれたから身体を許すの？」

「そんなことは言っていないわ」

由紀子は心外だとばかりに口を尖らせた。

「じゅあ、泊まっても何もしないつもり？ そんなことができるの？」

「どういう意味？」

「だから、彼は指をくわえて一晩過ごすことになるわけじゃない？ そんなこと大の大人ができるのかなあ」

美香は考える顔になってビールを一口すすった。

「あたし、思うんだけど。あたしの身体だけが目的じゃないような気がするんだけど。杉山さんはそんなにプレーボーイじゃないわ。それだけの目的で私を誘っているわけじゃないと思うけどなあ。むしろ女の子を大事にする人だと思うけど。それは何度が食事して、話してみte感じたことなんだけど」

「……」

「それにあたしは許さないなんて一言も言っていないわよ」

「じゃあ、やっぱり許すつもりなんじゃない」

回りくどい言い方しないでよ、と美香は呟いた。

由紀子にしても、美香にしても、仕事柄男を見る目は肥えている。

数多くの男と話しているうちに男の考えていることなど見抜けるようになった。彼女たちにもプロ意識がある。逆に、それが敬遠される理由になることもある。

「許す、許さないは別として彼はとても紳士よ。そんなにガツガツしてるとも思えないけど」

「それはあたしもそう思うけど……。なんか釈然としないのよね」
美香は何度も首をかしげている。

美香の恋愛は、どちらかといえば奥手の方だ。好きでも簡単には身体を許さない。慎重に慎重を重ね、自分が傷つかないようにしてから相手の中へ飛び込む。

時として、タイミングを外して大事な人を失うこともある。

一方由紀子の方も、美香と同様に慎重派だった気がする。今回の由紀子の大胆な行動は美香には衝撃的だし意外だった。

「簡単に決まっちゃったっていう印象が、美香さんの中にもやつぱりあるんでしょ？ あたしに慎重さが足りないかなあ」

由紀子は小首をかしげた。彼女自身は言葉とは裏腹に慎重さが足りないとは思っていないようだ。ただ、周囲が心配するので自分の行動が軽率に思えてきたのだ。

「あんまり慎重すぎて、いい人を逃す羽目になってもバカみたいだけだね」

美香はふふつと笑った。自分と重ねたのかもしれない。

「美香さんはどうなんですか？あたしのことより、自分の心配は？」

由紀子は、今回の件であまり周囲に騒いで欲しくなかった。さすが美香のほうに話題を振ったのである。この辺の話題の振り方はふたりとも上手い。

「あたし？ あたしは別に普通よ」

美香は平然と言った。触れられたくないというより話すほどのネタがないといったげだった。

「神林さんのこと好きなの？」

「嫌いじゃないわ」

「それこそはつきりしないわね」

「自分でもよくわからないのよ。彼の考えていることが何なのか。あたしに対しても、どう思っているのかわからないの」

「美香さんのことを気に入ってるに決まってるじゃない」

何を今更言ってるの、といったげに由紀子は美香を見返した。

「そうじゃなくて。神林さんてさあ、杉山さんと違ってなにも言わない人なのよ。物分りがいいっていうか、情熱的じゃないっていうか、今ひとつ本気なのかなって不安になるのよね」

確かに神林はクールな男に見える。少なくとも杉山とはタイプが違う。店でも、いつも冗談を言って女の子を笑わせているのは杉山の方だった。女の子に対しても、綺麗だとか、素敵だとか、可愛いだとか平気で言ってるのは杉山の方で神林は絶対に言わない。その態度は美香と二人になってもそうだったのである。

「気持ち伝わってこないの？」

「あたしたちの仕事って、同伴があつたりアフターがあつたりするでしょ？ もし、本気で好きなら、そういうのって嫌がらない？ 杉山さんはどう？」

由紀子は急に振られて思案した。杉山とはそんな話をしたことはなかったが、嫌がつている素振りもないように思う。

「神林さんも杉山さんも大人だし、あたしたちの仕事を理解してるから、いちいち嫌がつてられないのよ。嫉妬したって仕方ないでしょ」

「一泊しようなんて、誘ってもこないわよ」

「誘わせないように、知らず知らず壁を作ってるんじゃないの？ あとは、きっかけがなかったか」

由紀子は、そうよそうだわ、と言ってひとり納得していた。杉山と由紀子のデートだつてもとはいえば、アンバサダーホテルに泊まってみたいという由紀子の申し出に、杉山が本気で予約したのがきっかけで、由紀子としては、最初は冗談だと思ったほどだが、杉山の熱意と真摯な気持ちに心が動いたのだ。

一泊するからといって杉山を愛しているかどうかは、今の由紀子にはわからなかった。

「好きっていわれたことないの？」

由紀子は恐る恐る聞いてみた。

「ないわ」

簡単な答えが返ってきた。

「もっとも、神林さんはそういうこというキャラじゃないもんね」

「杉山さんはそういうキャラかな？」

「結構言う人だと思うわ。でも、あういう性格でしょ。本気なのか冗談なのか判断できないときがあるのよね」

由紀子は苦笑いしいワインを飲んだ。

「杉山さんには好きって言われたの？」

美香に覗き込まれた由紀子は少し考える顔をして、
「そういえば言われてないわ。でも、気持ちが伝わってくるっていうのかなあ」

「あら、ごちそうさま」

といって二人は笑った。しかし、すぐに由紀子が真剣な表情に戻ると、

「もし、神林さんが一泊しようって誘ってきたら美香さんはオーケーするの？」

美香はしばらく黙って考えていたが、

「言われてみないと何とも言えないわね」

上手くかわされたって気が由紀子にはしていた。

結局、お互いが自分のことは棚に揚げて相手のことを心配しているのだが、その反面自分たちの行動や成り行きにも自信がなくどこかで救いを求めているようなところがあつたのである。

「もし、神林さんが情熱的に迫ってきたら美香さんは身体を許す？」

「由紀ちゃんはどうなの？」

と反対に聞いてから、思い出したように、

「当然一緒に泊まるんだから、許すに決まってるか」

詰まらないことをきいたわ、といったげに溜め息をついた。

「またその話？今は私が聞いているのよ」

由紀子はいかわされたと思いい口を尖らせた。それに許す許さないの議論はもう終わったはずだ。

「そうねえ・・・」

美香は思案する表情で三杯目のビールを一気に飲み干した。美香にしては、ペースが遅いようだが、これから夜の仕事があることを考えるとあまり無茶はできない。

「その場になってみないとわからないけど・・・」

「けど・・・？」

由紀子は身を乗り出して、美香の次の言葉を待った。

「多分許さないわ」

「何故？随分慎重じゃない？」

「そうじゃなくて、彼の本心が見えないから。今求められたら、身体だけが目的だったんじゃないかって思っちゃうのよ。由紀ちゃんみたいに確かに愛されているって、確信があたしには持てないの」

美香は少し寂しそうに言った。神林の優しすぎる態度とクールな性格が裏目に出ているのである。男は物分りがいいだけではいけないのである。というより、彼女たちも普通の女であり、普通に恋をし、嫉妬し、安らぎと確かな愛を求めているのだ。気になる男からやきもちのひとも焼かれたいのである。

「あたしだって、そんな確信もってないわ」

「じゃあ、どうして一緒に泊まったりするの？」

「一緒に泊まるって、そんなに意味が深いことなの？一緒に泊まる以上は身体を交わらせないといけないことなの？杉山さんだってあたしの身体なんて興味ないかもしれないじゃない？」

由紀子は少しムキになって声が若干大きくなった。由紀子の興奮ぶりに美香は少し驚いたが、しばらく考えてから、

「そうよね、あたしたちはこんな仕事をしているから、つい男は下心であたしたちを見ていると思いがちだけど、そうでない人だって

いるものね。もしかしたら、あたしたちの方が意識しすぎているのかもしれないわ」

果たしてそうだろうか？ 成熟した男女が同じ部屋で一夜を共にする。何も考えずに過ごすことが可能なのだろうか？いくら、杉山が紳士でもやはり男：なのである。美香は自分で発言している側からそれを否定していた。だが、そういう男がいてもいいではないか、という希望はあった。

「たとえ彼に下心があったとしても、あたしなら上手くかわせるわ」「えっ、今何て？」

由紀子の意外な発言に美香は自分の耳を疑った。最初、照れ隠しに冗談を言って誤魔化しているのかと思った。しかし、由紀子の表情がそれを否定していた。

「泊まっても、彼に抱かれることはないって言っているのよ」

由紀子はやんわりと言い放ってワイングラスを持ち上げた。

「そんな・・・、杉山さんはそのことを承知なの？」

「承知も何も、彼はあたしに泊まったらやらせるなんて一言も言っていないわよ」

「でも、それは・・・やっぱり」

「あたしは一言もやらせるなんて言っていないし、一緒に泊まるイコール抱かれるにはならないでしょ」

美香は愕然とした。と同時に、杉山直樹の人のいい優しそうな笑顔と、寂しそうに微笑む顔を浮かべて、哀れだと感じた。

由紀子は何を考えているのか美香には理解できなかった。美香がそれでもなお何か言おうとしたとき、由紀子が、

「神林さんの気持ち、早急に確かめた方がいいと思うわ。さあ、もう時間よ」

由紀子が伝票を持って立ち上がるうとしていたが、何故か美香は立ち上がれず、由紀子の無邪気に笑う表情を凝視していた。

【続く】

第4章 運命の夜

第四章、運命の夜

杉山直樹は震える手で、眠ったように目を閉じてじっとしている女のバスローヴの紐をゆっくりと解いていった。

自分は緊張している。そう、杉山は感じた。女と寝るのが初めてというわけではないにもかかわらず、この緊張感は何だろう。結構シャイなところがあつたのだ、と彼自身驚いていた。

彼女は目を閉じて、ベッドに静かに横たわっている。それは、さしずめ白雪姫が王子様のキスを待って、深い眠りにについているようだった。

杉山が、バスローヴの胸元を捲ると、九十センチ近くあると思われる、豊かなそれでいて少しも形の崩れていない乳房が目の前に現れた。もちろん下着はつけていない。

杉山は、ごくりと生唾を呑み込んだ。誘ってよかった。あんなに躊躇っていた自分が馬鹿らしく思えるほど、今の情景が美しく、メルヘンチックに感じられた。結ばれるべくして結ばれる、そう彼は意識した。やはり、俺たちはこうなる運命だったのだ、そう確信した。

右手が、彼女の左の乳房を包み込むように触れた。ぴくりと彼女の身体が反応する。彼の手のひらの中で、少し紅みがさした、マシユマロのような乳房と、薄いピンク色の乳首が小刻みに震えている。この子も緊張している。そう、杉山は感じて、右手を乳房から外し、彼女の左頬に伸ばした。顔を近づけ、自分の唇を彼女の唇に軽く触れた。柔らかい、つるつるした彼女の唇は、ほんのり濡れていた。

彼女は、軽く唇を開いた。彼は、今度は少し強めに唇を押し付け、

そつと舌を這わせた。彼女の唇が杉山のそれに纏わりついてきた。杉山の緊張はまだ取れない。むしろ、彼女の方が落ち着きを取り戻し始めている。杉山の唇が、彼女の唇を離れ、首筋へと流れ、同時に右手が再び彼女の左の乳房へと移った。ゆっくりと、ゆっくりと指先に力を入れていく。

杉山の唇が彼女の右の乳房を這い、舌が隆起した小さな乳首に到達した時、彼女の唇から小さな喘ぎ声が洩れた。杉山の首筋に、彼女の右腕が廻り、指先に力が入っていた。彼女の左手には、ベッドのシートが固く握られている。彼女は、なるべく声を出さないように堪えているようだったが、自然と息遣いが荒くなっていた。彼のそれは、既に男らしさを十分に備え、彼女の中へ入る機会を待っていた。彼女の気持ちも徐々に高ぶり始め、受け入れる態勢を整えていった。彼の指先が、彼女の高揚したしなやかな肢体を滑り、彼女の薄く整われた恥部へといざなわれた。ぴくつと彼女の足が小さく動いた。細く長い、すらつと伸びた形のいい足だった。彼女のそれは、杉山の愛情を精一杯受け入れるために潤っていた。杉山の指が、ゆっくりと優しくその潤いを感じ始めている。

「あつ・・・」

彼女の口から、我慢しきれずに声が洩れた。空気に触れるとすぐに消えてしまうシャボン玉のような弱々しい声だったが、杉山にははっきりと聞こえた。美しい、杉山の心に訴えかけるような声だった。

杉山の舌は、徐々に彼女のくびれた腰へと下りていき、更に彼女の蕾へと滑っていった。そこは、杉山が今まで行ったことのない未知の世界に足を踏み入れたような感覚にとらわれた。まるで、静寂した広い湖のほとりにひとりたたずんで、そつと湖の水を波立てているような感じだった。

杉山は、今までの人生で何人もの女を抱いたが、彼女はその誰とも違うような印象を受けた。湧き出る潤いの中を、杉山の舌が滑らかに踊った。女の口から嗚咽が洩れる。彼女の身体が大きく波打って

仰け反っていった。杉山は、彼女の十分な恵みを感じ取ると、自分の身体を左手で支えながら、再び彼女の首筋まで戻った。杉山は、彼女の上にゆっくりと、二人の意識を確認するかのように重なっていった。

女は、杉山の重みを十分に感じながら、彼の情熱が自分の中へ溶け込んでくるのを待っていた。

ひとつになる、と杉山は確信した。

杉山にとって、それは一生分の偉業を成し遂げたような価値があった。この日を待っていた。待ち望んでいたのだ。

「もう、君を離さない。君だけを見つめて・・・」

彼女がそつと眼を開け、杉山の唇を人差し指で閉ざした。言葉はいらぬ、そう語っているように思えた。

「あ、あなたを待ってた。今だけを見つめて・・・」

彼女の瞳が潤いを帯びて、一筋の輝きが流れ星のように頬を伝った。杉山が何か言いかけた時、耳元でけたたましい音が鳴り響き、慌てて飛び起きた。

杉山直樹の朦朧とした意識が徐々にはっきりしてきた。見覚えのあるベッドの上に起き上がり、あたりを見回した。現実と夢がまだ混同されている。

「なんだ、夢か・・・」

自分は一体何と言う夢をみていたのだろう。夢に見るほど彼女を抱きたいという願望が強くなっていたのだろうか、と自分に驚いていた。

予知夢なのか。しかし、夢の相手が唯惟だったかどうか、今ひとつ記憶がはつきりしない。もしかしたら、あれは花梨だったのではないかとも思えた。ここ数日間、唯惟と一夜を過ごすことの重大性やいっぽうでは花梨に対する罪の意識などを考えていたので、それが屈折した形になって夢にまで出てきたのかもしれない。それにしても、何と言う夢なのか、杉山は少し顔を赤らめて頭を振った。手

が少し汗ばんでいる。果たして、自分に唯惟と寝たいという願望があったのだろうか、いや、ないとは言えない。あれほどの美人だ。手の届くところにあつて、放っておくほど彼は紳士ではない。しかし、花梨ならいざ知らず、夢の相手が唯惟だったとしたら、やはり自分は唯惟と結ばれる運命にあるということなのだろうか。とりあえずベッドを離れ、いい加減に止めるといいたげにけたたましく鳴り続けている目覚まし時計を止めた。カレンダーを見て、今日が二月九日であることを確認してようやく行動に移した。本来なら、いつもと変わらない一日が始まるうとしていた。

午前七時二十分に自宅を出て、ぎゅうぎゅう詰め押し潰されそうなJR東海道線に乗って新橋駅まで憂鬱に過ごす。新橋駅からは、六本木經由渋谷行きのバスに乗る。午前八時四十五分に毎日オフィスに出社するのである。ところが今日は違っていた。今日は特別な日なのだ。

だが、浮かれるのはまだ早い。何が起こるかわからないのだから。ここは、落ち着いて普段どおりの気持ちになることだ。

杉山は、そう自分に言い聞かせはやる気持ちを押さえていた。普段どおり、ビジネススーツに着替え普段と同じような気持ちで家を出ればいい。

どういう成り行きになるのかわからない。どういう結果が待っているのか見当もつかない。だが、ひとつ感じるのは、どういう結末になるうとも、それがベストの選択なのだと信じることにしていた。くよくよ迷った末、結局延期もキャンセルもなかった自分の決断を、後で後悔だけはしたくなかったが果たしてこれで良かったのか自信はなかった。

信じるしかない。自分を信じるしかないのだ。

杉山はそう自分に言い聞かせて家をあとにした。

寒い一日になりそうだった。どんより曇った空は、今にも泣き出しそうな怪しい雰囲気を漂わせていた。それは、あたかも杉山の心の中を表しているかのような、そんな天気だったのである。

時間が過ぎるのがいつもより遅く感じた。会社で仕事をしていても、どこか心ここにあらずといった感じだった。電話が鳴るたびに、唯唯からのキャンセルの申し出ではないかと思っ、落ちて着かなかった。

この日の杉山の仕事はそれほど忙しいものではなく、また重要な会議や接客もなかったので、集中力が欠けて大きなミスをするようなことはなかったが、反面時計との睨めっこで、時間が過ぎるのがとても遅く感じられた。結局唯唯からは、懸念していたような電話もなく、2本ほどメールが入っただけだった。しかも、そのメールも、「本日は宜しく願います」というものと、「あいにく、天気が悪そうですね」という杉山の返信メールに対して、「もしかして、あなたは雨男…？実は、私は雪女！」と冗談交じりに問い掛ける愛嬌のあるもので、杉山の安心感を誘った。

外はどんよりと曇っていた。杉山の頭の中もすっきりとしない、この空のようなものだった。こんな気持ちのままではいけない、何度自分に言い聞かせたか知れない。

「今だけを見つめて・・・」

夢の中で潤んだ瞳で彼女はそう自分に訴えていた。その言葉が杉山の脳裏から離れなかった。

唯唯は、杉山の心の動揺を知っているのだろうか？杉山の気持ちが花梨に傾きかけていることに気づいているだろうか？それを知った上で、敢えて杉山と一夜を共にしようとしているのだろうか？それとも、何も知らずに杉山を信じきって身を任せようとしているのか？もしそうならば、杉山自身罪深いことをしようとしている、と思われても仕方がない。それは、花梨に対しても同じことが言えた。果たして、本当に今だけを見つめていればいいのだろうか？

この後に及んでも、杉山は迷いを消すことができなかった。
キャンセルするなら、まだ間に合う時間だった。

黒のBMWが、ベージュを基調としたシックな建物に吸い込まれるように入ったのは、二月九日の午後八時を五分ほど過ぎた頃だった。

雨は降らなかったものの、どんより曇った空は一日続き、気温も五 くらいから上がることなく、夜を迎えようとしていた。

午後六時三十分に中目黒の駅前で唯惟を拾った杉山直樹は、そのまま首都高から湾岸道路を通過して浦安に着いた。思ったより道路が混んでいたが、車の中ではもっぱら唯惟がデイズニーランドの話をしていたので退屈はしなかった。

杉山は会社帰りなのでスーツ姿だが、唯惟はショッキングピンクのセーターに赤と黒の柄のロングスカート、白のオーバーコートを着ている。どこから見ても、水商売の女には全く見えない。化粧もいくらか薄いように感じた。

清楚、という言葉がぴたり当て嵌まるような姿だった。

一階駐車場は、既に車で満車状態だった。それでも、ホテルへの専用通路がある近くを探して、何とか車を停めたのが、午後八時十分前だった。

二人は、建物の一階駐車場から、専用通路を使ってホテルのエントランスに向かった。

唯惟念願のデイズニーアンバサダーホテルである。

イクスピアリと一体になっている、デイズニーアンバサダーホテルは、その名のとおり、デイズニーワールドを創り上げ、訪れる者をメルヘンの世界へ導いた。

デイズニーアンバサダーホテルのフロントは、金曜日の夜ということもあって、かなりの宿泊客でこった返していた。小さな子供連れも多いが、やはり一番目立ったのが、二人のような若いカップルだった。

正面玄関の自動ドアから中に入ると、広いエントランスがある。デイズニーキャラクターのトピアリーやアルデコのレリーフ壁画を使用している。エントランスを左に向かうとロビーがあり、右手

にはグランドステアケースがある。グランドステアケースとは、ロビーからバンケットルームへと続く大階段のことを言い、優雅な曲線と壁一杯の城の絵が、訪れた者を華麗なディズニーストーリーへと誘っている。バルコニーレールには、ミッキーとミニーがかたどられ、金色に輝いている。アンバサダーホテルならではの演出と言えた。ロビーは、三階分の吹き抜けになっており、ゆったりとした空間を作り出している。天井には、ピーターパンやダンボたちの星座が描かれており、きらきらと満天の星空のように、光輝いていた。全室で五百四室。アールデコのクラシックなデザインと上質な造りが、ゆったりとくつろげるように設計されている。全てがメルヘンチックだった。フロントは思ったより広くない。ソファや装飾品の随所にアールデコを使用しているが、反面その所為で開放感に欠けてしまっていた。

フロント前のテレビでは、ディズニーマニアアニメが放映されており、チエックインの間、子供たちが退屈しないような工夫もされている。二階の通路には、円形の不思議な窓があり、壁の照明はリンドウの花のような形をしている。

杉山と唯惟は、フロントを通り過ぎてエレベーターへと向かった。六階建てのアンバサダーホテルの、最上階がアンバサダーフロアとされていて、アンバサダーフロアに宿泊する客は、最上階のラウンジでチエックインやチエックアウトの手続きが出来るようになっている。さすがにスタンダードフロアとは扱いが違う。エレベーターに乗ると、「ドアが閉まるよ」という、ミッキーマウスの声が聞こえた。六階に到着すると「6階だよ」とアナウンスする。視覚障害者にとって、もっとも利用しづらいエレベーターを、こんなにもスマートでかつ耳に優しい方法でユニバーサル対応を図っている、このアイデアには感嘆の意を表さずにはいられない。

思わず、「六階だよ」と唯惟も真似ていた。こうしてみると、唯惟は落ち着いているようだ。むしろ、杉山の方が緊張していた。

アンバサダーフロアにある専用ラウンジは、一九三〇年代の特徴

である、ゆったりと落ち着いた独特の雰囲気を再現していて、ソファや調度品、シャンデリアなど細部に至るまで徹底してアールデコを使用している。従業員は笑顔を絶やさず、あくまで上品かつ丁寧に対応し、絶対に客を不快にさせない。

杉山たちは、二分ほどでチェックインの手続きを終えると、ベルボリーの案内で客室へと案内された。廊下は五メートルごとにカーブしており、部屋のドアは豪華客船の客室ドアのような装飾が施されている。

杉山がリザーヴした、十万円のスイートルームに入ると、すぐ右手にパウダールームとウォークインクローゼットがある。その先のリビングには、ラブチェアとテーブルが置いてあった。その向こうに、中庭のプールが一望できるテラスがある。部屋の広さは二十坪ほどあろうか。ひとつの部屋を、木製の大きな棚が真ん中でリビングと寝室に分断するように置かれている。両側にテレビが設置されていて、どちらからもテレビが見られる。二人でチャンネル争いをしなくて済む。サイドボードには酒がセンス良く並んでいる。棚を挟んで向こうには真ん中にダブルベッドが置かれてあり、右手には浴室へ通じるドアがある。浴室の前の右手にクローゼットがあり、浴室に入ると正面がドレッシングルーム、右にパウダールーム、左にバスルームがある。バスルームの手前にはシャワールームも備わっていた。

スイートルームにしてはそれほど広くなく、部屋の造り自体ごく普通だった。

壁はベージュで、カーテンは薄い水色、装飾や壁の絵なども落ち着いており、毒々しさが感じられないのがありがたかった。

アンバサダーフロアの特徴は、部屋に備えられているアメニティグッズが、全てミッキーマウスを施してあるということであり、女性に人気があるのがわかる気がした。

現に、唯唯は目を輝かせ、子供のようにはしゃぎ回っていた。一度は泊まりたかった念願のホテルに、今まさに自分はいなのだ。我

を忘れるのも無理はない。

ひととおりベルボーイが説明を終えると、にこやかに退出していった。この辺の教育も行き届いている。杉山はドレッシングルームで、とりあえずスーツを、シャツとセーター、スラックスに着替え、夕食へ行こうと唯惟を誘った。

時刻は、午後八時三十分を廻っていた。

夕食を終えて再び部屋に戻ってきたのは、午後十時三十分を少し廻った頃だった。たつぷり二時間ディナーを取ったことになる。ディナーは、ホテルの一階に併設されている、「エンパイアグリル」というレストランでフランス料理のディナーコースを注文した。上品な味の赤ワインで喉を潤し、美味しい食事で女性の気分を高めていく。男が女を口説く時の常套手段である。二人は屈託のない、それでいてお互いを知るうえで大切なコミュニケーションを取っていた。気分もだいぶほぐれてきた頃、二人は部屋に戻ってきたのである。

「今だけを見つめて」

杉山の頭の中で、夢の中の言葉が半鐘のように繰り返し響いていた。

「今だけを・・・か」

「えっ？」

つい声に出してしまった杉山の言葉に唯惟が聞き返した。

「いえ、何でもないです」

「美味しかったわ」

「そう、それはよかった。でも、本当の楽しみは明日の朝なんですよ？」

「そうなの。明日が楽しみ」

唯惟は、「明日はシェフ・ミッキーだからね」と言ってふふっと笑った。

シェフ・ミッキーとは、ホテル内にあるレストランの一つだが、

ここでの特徴は、ブレックファースト、ランチ、ディナーのどれでも、決まったある一定の時間に入ると、デイズニーキャラクターたちが、テーブルにやってきてくれるという、デイズニー好きにはたまらない趣向を取っている。予約制になっていて、これも唯惟が杉山の提案をOKする条件のひとつであり、杉山は忠実にそれを守ったことになる。

お腹一杯といってソファにゆったりと身を沈めた唯惟を、杉山は微笑みながら見ていた。彼女といると、下種な考えが消えていく。そんな気がしたが、だからといって引き下がるわけにはいかなかった。

杉山は緊張感が高まっていくのを覚えた。なにしろこういうシチュエーションに慣れていない。いよいよだと思った瞬間、身体が緊張でぎくしゃくしてくる。それにひきかえ、唯惟は、ソファに座って手帳をバッグから取りだし、落ち着いた動作でぺらぺら捲っている。

杉山は、場の雰囲気息苦しくなって、手元のリモコンを取り、テレビのスイッチを入れた。静寂な部屋が一瞬のうちに、テレビのバラエティ番組の喧騒に変わった。

唯惟はチラッとテレビを見たが、興味なさそうに相変わらず自分の手帳を見ている。

杉山は、ソファに唯惟と並んで座ると、テレビをじっと見つめていた。もちろんテレビの内容などは全く頭に入ってきていない。このあとどうしたらいいのか、何をすべきなのか思索していたのである。

「な、なにか飲む？」

杉山が口を開いた。唯惟は静かに首を振ると、

「さっき、沢山食べ過ぎたわ。お腹一杯でもう何もはいらない」

と、優しそうな眼差しを杉山に向けた。

「そ、そうだよ。け、結構量が多かったから……」

杉山の口調はおぼつかなかった。日本語を覚えてたての外国人の口

調だった。

五分ほどの沈黙が続いた。この情景を第三者が見たら、とてもこれから一緒に泊まるカップルとは思えないだろう。むしろ、陰悪なムードを漂わせながら、それでも一緒にいるしかない夫婦のように見えたかもしれない。

「面白い？」

沈黙を破るように、唯惟が杉山を覗き込んで訊いた。

「ん、まあまあ……かな」

杉山は曖昧に答える。もちろんテレビの内容などわかっていない。「先にお風呂どうぞ」

唯惟が促してきた。

「えっ？あつ、ゆ、唯惟さんから入って」

杉山は、唯惟に先に入るよう勧めたが、後で考えると、最初の誤算はここにあつたかもしれない。

「それじゃあ失礼して、お先に入ります」

「どうぞ」

唯惟はあっさり承諾すると、さっさとドレッシングルームに消えていった。タオルやバスローヴなどはドレッシングルームに備わっている。唯惟自身の着替えは、ドレッシングルームの手前のクロゼットにあるはずだから、そのままバスルームに消えて当然だった。杉山は、唯惟がバスルームに消えていくのを目で追ってから、再びテレビに視線を向けた。だが、相変わらずテレビの内容が頭に入ってこない。集中力が全くない。むしろ、気持ちはバスルームの方にあつたからだ。扉が閉まっているので、音は全く聞こえないが、何故か唯惟の入浴しているシーンが伝わってきた。きっと、優雅で可憐な入浴シーンなのだろう、と杉山は変な想像をしていた。もし、今日決められたら、明日は一緒に入ろう、などと勝手にひとり考えて顔を赤らめていた。

三十分ほどで唯惟は出てきた。白のバスローヴを身に纏って、化粧を落とした素顔で、「お待たせしました。さあ、どうぞ」と言っ

て杉山の隣に腰を下ろした。

杉山はまじまじと唯惟の顔を見つめた。

「あんまり見ないで、はずかしいわ」

「変わらないよ」

「よく言われるの。お化粧あまり濃くしないから」

「唯惟さんは化粧を取ると、綺麗っていうより可愛らしくなっちゃうんだね」

実際唯惟は可愛かった。ホステスの時には、あくまで妖艶で美しさを追求しているが、こうして素颜になると、少女のような清楚でかつ純真なイメージを醸し出している。

「お化粧を取ったら、カメラ・ブルーの唯惟じゃないわ。由紀子よ。由紀子かゆきって呼んでください」

こういう言い方も男心をくすぐるのだ。自分だけの女、そんな気にさせてくれる。まだ、そうなったわけではないのに。

杉山は、つい抱きしめたくなる衝動を堪えて、

「じゃあ、入ってくるね」

といってソファを立った。慌てることはない。夜は長いのだ。

杉山はそう自分に言い聞かせて、しかし、本当の意味で長い夜になるとは、この時の杉山には全く想像できなかったのである。

いつもは長風呂で有名な杉山が、十五分ほど出てきたとき、時刻は午後十一時四十分を過ぎていた。杉山の入浴は、丁寧に洗ってはいったものの気はそぞろだった。驚いたことに、バスタヴの湯は、由紀子が出たあと、由紀子自身が湯を張りなおしており、きめの細かさを実感した。

由紀子とお揃いのバスローブを纏って部屋に戻った杉山は、由紀子を見ておやつと思った。由紀子は、ソファで、自分の携帯電話で誰かと通話中だった。

「それやから、あんたは嫌われるんや」

大阪弁である。由紀子は大阪出身だったかな、などと暢気なこと

を考えながら、杉山は由紀子の隣に座った。由紀子はちらつと杉山を見たが、いっこうに電話を終わらせる気配はなかった。電話の相手は明らかに男である。

杉山の頭にちらつと嫌な予感が走った。相変わらず、隣では馬鹿笑いをしている由紀子がいる。そういえば、今日一緒にいて、こんなに馬鹿笑いしている由紀子は見えていない。心から気を許している相手のようだった。

杉山はぼんやりテレビを見ながら、この状況をどうしたらいいか判断に困っていた。どういふつもりだろう。由紀子の意外な行動に、杉山は戸惑いを隠せないでいた。

「えっ、今？　綺麗なホテルにいるんよ。何？　無茶や、行かれる訳ないやん。どうぞ、勝手にやってください」

由紀子は楽しそうである。一体誰なのか、杉山の心中は計り知れないほどの不安で溢れていた。

もしかしたら、作画的？　杉山の頭に一瞬それがよぎった。どちらが電話をしたのかわからない。由紀子の方から掛けたとしたら・・。

当然入浴を終えた二人が次にすることといったら、由紀子にしても想像がつくだろう。本来、お互いにその気があれば、ムード作りに余念がない筈だし、また女は男に身を任せる心の準備に入る筈である。少なくとも、杉山の過去の経験からするとそうである。別の男と電話で談笑していて、終わるや否や「さあ、やろう」とベッドインする女はあまりいない。

杉山は、掛けていた梯子を昇り切る直前で外されたような気がして、一気に張り詰めていた緊張感が萎えた。もし、これが彼女の作戦だとしたら、杉山にたいしては大成功といえた。

電話は終わりそうもなかった。杉山はソファから立ち上がると、冷蔵庫を開けてビールを取り出した。杉山は普段、風呂からあがると三百五十ミリリットルの缶ビールを一本だけ飲む習慣がある。あまり酒を飲まない杉山が、唯一「酒が美味い」と感じる瞬間だった。

だが、この日はそれを我慢した。酔えば眠くなるし、酒の弱い杉山の身体にアルコールが入れば、そのあとの症状は明らかだった。それこそ役立たずになってしまふ。

だが、この状態は…。

「じゃあね、もう電話せんといてな」

最後にもう一回大笑いして電話を切った。電話を切った由紀子を見て、杉山は取り出した缶ビールを再び冷蔵庫に戻した。

杉山は「誰？」と聞きたい衝動を抑えて黙っていたが、意外にも由紀子の方から打ち明けてきた。

「今の、わたしの昔のお客さんなんだけど、今池袋で飲んでるから来いなんて言ってるんですよ。遠くて行かれる訳ないじゃないですかねえ」

近かつたらいくのか？ と問いたい気分を抑えて、杉山は「そう」と一言だけ返事をした。暫く沈黙が続いた。冷めたムードである。

これではいけない、雰囲気を変えねば…。勝負はこれからじゃないか。杉山は自分にそう言い聞かせて萎える気持ちを奮いたたせようとしたが、出鼻を挫かれたために、どうしても気分が好転しない。逆に、これは策略ではないのか？ 本当は最初からそんな気などなかったんじゃないのか？ などと悪いことばかり考えてしまつて、ムードを変えるところか、杉山の気分は悶々としていき、貝のように口を閉ざしてしまつた。経験の少ない杉山には、不幸にもこうなつてしまった時の対応策がなかった。指をくわえて成り行きを見守るしか術がなかったのである。

由紀子は、そんな杉山の葛藤を知つてか知らずか、鼻歌まじりに自分の手帳を見ている。時々携帯電話をちらつと見たり、どこか落ち着きがないように感じられたのは、杉山の思い過ごしではないように思えた。なにかを待っているような、何かから逃れようとしているような、そんな様子だった。

「寒いわ、もう寝る？」

「えっ？」

突然の由紀子の申し出に、杉山はハツとした。

「そ、そうしましょうか」

「あたしがソファで寝る？ それともあなたがソファを使う？」

「えっ？」

「冗談ですよ。さあ、いきましょ」

こうなると冗談には聞こえない。いや、冗談ではなかったかもしれない。由紀子はさつさとベッドに向かうと、ひとりベッドの中に沈んだ。杉山は、何故か振り回されているような気がしたが、テレビのスイッチを切ると、ベッドの方へ由紀子の後を追った。

「テレビのスイッチは切らないで。静かだと眠れないの」

すかさず由紀子がテレビを点けた。部屋が一転して明るくなり雰囲気が変わった。

杉山が複雑な思いで、由紀子の横に身体を滑り込ませた時、再び悪魔の警鐘が鳴った。由紀子の携帯電話である。

「はい、唯惟です」

杉山は、少なくとも部屋に入ってから、携帯電話の電源をOFFにしている。そのくらいの配慮は欲しいと彼は感じた。これは明らかに故意だ、そう確信した。テレビを点けていなくては眠れないというのも解せない。

「だから、今日は行けんちゅうたる。酔ってんの？ あんたの相手しとられへんのや。しゃあないやろ」

また長引くのだろうか？

由紀子にとつて、もしこれが杉山の欲求を萎ませる手段だとしたら、もう、十分効果はあった。杉山はここまでやられたら、手を出す気力も失せていた。いい加減にして欲しかった。そして、ここへ来たことを、杉山は後悔し始めていた。

夢は所詮夢だったのだろうか。結局自分はいままでなのだろうか。浮かれていた自分が愚かしく思えた。小娘に振り回されたのだ。水商売の女は平気でこういうことができるのだ。普通の女としてみていた自分がいかに世間知らずか、杉山は打ちのめされた思いで、悔

し涙さえでてこなかった。

電話は五分ほどで終わった。向こうから切ったようだ。

「あつ、そうだ。美香さんに自慢しようつと。こんな綺麗なホテルに泊まってるんだから、自慢しなくちゃね」

由紀子はひとりごちて、携帯電話のボタンを押し始めた。杉山は、仰向けで天井を見つめながらどうなってもいいと思っていた。もう、この女がなにをしても驚かない。むしろ、必死でこちらの気持ちをはぐらかそうとしているその努力が痛々しかった。大丈夫だよ。もうなにもしないと約束するから、と言ってやりたかった。多少、被害妄想的な意識を持つ杉山にとって、由紀子のこの行動は、相手の強引な電話を邪険にできない優しさ、と判断するより、杉山自身を遠ざけようと画策しているようにしか思えなかった。正直何かする気も失せていた。明日のためにゆっくり寝よう。そう言ってやりたかった。

「ほんとにもう、美香さんたら絶対電話にでないんだから・・・」
こんなときに、とてもいいたげに由紀子は渋々電話を枕もとに置いた。

「明日も早いから、もう寝たら？」

杉山は、喉の奥から無理に声を押し出すように言った。自閉症のような気分だった。杉山は、由紀子に背中を向けた。

敗北宣言だった。いや、最初から勝負になっていなかったのだ。結局杉山の見事なひとり相撲だった。明日、帰ったら神林に何て言おう、いや、明日一日由紀子とデイズニールランドで過ごさなければならぬのだ。自分に冷静かつ楽しそうにそれができるか不安だった。杉山は、中止になればどれほどよかったかをつくづく感じていた。

「眠い？」

由紀子が訊いてきた。

「少し・・・ね」

もう何かを期待するということはない。繕っても裏切られるだけ

だった。

「そう・・・」

由紀子は残念そうに呟いた。いや、背中を向けている杉山には、由紀子が本当に残念そうかどうかなんてわからない。むしろ、しめた、とほくそえんでいるかもしれない。ただ、声に元気はなかった。

「何か？」

杉山は振りかえって、ちらつと由紀子の方へ視線を投げた。

「少し話をしようかなって思ったの」

今更何の話をしようと思っっているのだろう、と杉山は思ったが口には出さない。

「話？ いいですよ」

杉山は姿勢だけを由紀子の方へと向き直し、由紀子の次の言葉を待った。

二人はダブルベッドに並んで寝ているが、杉山と由紀子の間には、人が一人寝られるほどのスペースがある。広いダブルベッドだと杉山は憎々しく思った。

少し、杉山は由紀子に身体を近づけたが、由紀子はそれを察してか後図去っていった。

「いまの電話ね、もと彼氏なの。」

何を言い出すのかと思ったら、そんなことだったのか。きっと、彼女にはここにいる二人の関係をより近づけようなどという気は全くないのだ。あるのは俺の気をはぐらかすことだ、そう杉山は感じた。

しかし、気をはぐらかすためだとしたら、既に彼女は勝利しているはずだった。杉山が寝よう、と決心しているのだから、いまさら起こして話し始めることのない気がする。やはり、話しがしたかったのだろうか。

「もと・・・？」

「ええ、もう別れてるんだけどね。暫くの間同棲をしていたことが

あるんです」

「そう・・・」

彼女が何を言いたいのかわからない。杉山に何を伝えようとして
いるのか見当もつかない。ただ、この場に相応しくない話題を振り
撒いていることは確かだった。

「不倫だったんです」

「不倫？ 不倫なのに同棲してたの？」

「ええ。彼があたしの家に住んでたの。不倫なのはわかってたんだ
けど、彼、奥さんと上手くいってないから、あたしの家に転がり込
んできて、近いうちに離婚するって言ってたわ」

男の常套句だな、と杉山は思った。

「でも、離婚どころか、奥さんがあたしのところに押し付けてきて、
凄惨修羅場だった。そのとき勤めていたお店に来てね、それであた
しはお店クビになったんです」

由紀子は天井を見つめて、当時を思い出すようにたんたと話し
ていた。杉山は、そんな由紀子を横向きの姿勢で見つめている。

「結局、彼は奥さんを取った。あたしの前から去って行ったわ」

ふいに、由紀子がバスローヴの右手を捲って右手の手首を杉山に
見せた。

小さな傷があった。

杉山は愕然とした。その傷がなにを示しているのかはつきりとわ
かった。

「普段は見えないんだけど、お酒を飲んだり、お風呂から出ると、
はつきりわかるんです」

由紀子は、右手をバスローヴの中に仕舞うと、

「本気で信じてたわ。本気で愛してた。だから、死んでしまいたか
った」

由紀子の頬を一筋の涙が伝った。嘘の涙ではないだろう。

さっきとは違う重苦しい空気が流れた。杉山の頭の中は真っ白だ
った。何て声をかけたらいいのか、杉山にはわからなかった。女が

不倫関係にあり、こじれた末に自殺未遂をするという話しは、それほど珍しいこと話ではない。身近にそういう女が現れたとしても不思議ではないだろう。

杉山が信じられなかったのは、その話しが今出たことだった。

「それから、男の人を愛せなくなってしまったんです。男の人を信じられなくなっただんです。優しくされれば優しくされるほど、それが虚像のような気がして・・・」

由紀子は嗚咽を漏らした。彼女の言葉に嘘はないだろう。杉山の下心をはぐらかすための作り話では決してないことは確かだった。辛い過去だったこともわかる。男に対して猜疑心が生まれてしまうことも理解できる。しかし、それとさっきまでの行動とは全く一致していないように思えてならない。むしろ、矛盾しているような気がしてならなかった。

今の杉山には素直に由紀子の話を受け入れられない、気持ちの中の憤怒感が存在していた。杉山もそれほど大人ではない。しかも杉山自身は独身である。不倫関係を迫っているわけでもなければ、遊びだと断言しているわけでもない。俺の優しさも思いやりも虚像だと思っているのか。信じられないと言いたかったのだろうか？それとも、もっと別のなにかを自分に期待しているのだろうか？自分に話すことによって、気持ちが癒されるとは思っていないだろうか？では何故自分の過去を話すのだろうか？

いつ頃の話なのかわからない。こうして人に話せる、そして自殺の原因を作った相手とも楽に話せるようになったのだから既に吹っ切れているはずだった。それだけ時間が経過しているのだ。

それなのに、過去を引きずっている。男を信用できない。人を本気で愛することを恐れている、心のキズとはそういうものなのだろうか。

それにしても・・・と杉山は考えた。

では、何故由紀子はここにいるのだ？どうして、自分の申し出に承諾したのだ。彼女にとって、男と一泊することはなんでもないこ

となのだろうか？

男心を平気で裏切れる女なのだろうか？

由紀子の告白は確かに衝撃的だった。だが、彼女の矛盾した行動、自分と一泊することの意味をきちんと理解していたのだろうか？

どこか舐められているような気がしてならなかったのである。

杉山は、天井に向き直って目を閉じた。

初めから今日は杉山に抱かれる気など由紀子にはなかったのだ。

前の同棲相手から電話がきたのは偶然だとしても、それがきっかけでその気がなくなったとは考えられなかった。もし、杉山に抱かれる意思があつたのなら、きっと携帯電話の電源は杉山のように切っているに違いない。

杉山は大きな溜め息を吐いた。とんだ道化師だった。

順調に見えた二人の関係は、実は何も始まっていなかったどころか、自分自身が嫌になるような、つまらない終焉を迎えようとしていた。今日まで、この日を迎えることを悩み、花梨との葛藤に苦しみ、迷った挙句に唯々に賭けてみようかと思ひ始めた矢先の告白。神林を巻き込んでまで、色々話し合ったことは一体何だったのだろうか。全てが時間の無駄、全てが取り越し苦労だったのだ。杉山は怒りが込み上げてくるよりも、自分が情けなくて、哀れで不甲斐なかった。浮かれていた自分がとてもバカに見えた。所詮、自分はこんな人生なのだ。杉山は、自分に愛想がついていた。

由紀子は、杉山に背中を向けて相変わらず嗚咽を漏らしている。

演技だとは思いたくなかったが、杉山には慰める気力も失せていた。杉山の脳裏に、カラカラと心からおかしそうに笑う花梨の笑顔が浮かび、無性に花梨に会いたくなった。

花梨はどうしているだろうか？

自分と由紀子がこうして一泊していることを知っているのだろうか？

花梨に知れて、花梨に不信感を持たれることを今更のように杉山は恐れた。

「今だけを見つめて…」

杉山の頭の中で、夢に出てきた彼女の台詞が虚しく響いていた。本当に今だけを見つめなければならぬのは、由紀子の方ではないのか。回り道をした。だが、今はっきりと杉山の本当の気持ち杉山自身わかったような気がした。

俺は花梨が好きだ。

こうなったから花梨に乗り換えるわけじゃない。ここへ来るまでも、ここへ来てからも、なにかモヤモヤしたものがあつたことは事実だつた。

由紀子の告白が、杉山の本当の気持ちを引き出したのだ。

「きつと、きつと忘れられると思う。それまでそつとあたしを見守ってください」

消えそつな声で由紀子は杉山に背中を向けたまま言った。杉山の脳裏に、さっきの馬鹿笑いをしていた由紀子の姿が浮かんでは消えた。おそらく待てないだろう。自分にとって本当に必要なのは、過去を忘れて自分の胸に飛び込んできた由紀子ではなく、自分のことを只の客としか思っていないくても、屈託ない笑顔をみせてくれる花梨の方だとはっきりとわかつたのである。

【続く】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0563w/>

恋愛ゲームの法則

2011年10月5日03時12分発行